



TITLE:

記録: 国際教育研究フロンティア
B「韓国教育課程変遷、遂行評価
、入学査定官制」

AUTHOR(S):

CITATION:

記録: 国際教育研究フロンティアB「韓国教育課程変遷、遂行評価、
入学査定官制」. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざ
して 2011, 中間報告書(2010年度): 77-134

ISSUE DATE:

2011-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179630>

RIGHT:

▶ 記 録

国際教育研究フロンティアB
 「韓国教育課程変遷、遂行評価、入学査定官制」

授業者 康 承恵（カン スンヘ）先生
 （延世大学 教育学科教授）

日時：2010年7月30日31日 9:00～17:00

教室：教育学研究科（総合研究2号館）第2演習室

第一日目 午前の部「韓国教育課程変遷」

通訳：趙 卿我（教育実践コラボレーションセンター助教）

記録：奥村 好美（教育学研究科修士課程1年）

※康 承恵先生（以下、Tとする）、他の先生方を含め受講生（以下、Sとする）

田中先生：おはようございます。ただ今から国際教育研究フロンティア B の授業を始めたいと思います。この授業は、外国においてその分野ですぐれた業績をあげている先生をお招きして集中講義という形でお話を伺う授業です。今回は、韓国の延世大学の康承恵（カン・スンヘ）先生をお招きし、韓国における教育課程・教育評価の問題についてお話をいただくことになっています。

康先生の研究の歩みについては、先生が講義のなかで詳しくお話になると思いますので、ここでは簡単に先生の紹介をしたいと思います。康先生は延世大学の大学院を修了されています。専門は教育学、特に教育課程の研究をされています。現在は、外国語としての韓国語教育科の準教授をしておられます。さらに、国際韓国語教育学会の理事、韓国の教育課程評価院の評価委員、延世大学語学研究所（ロサンゼルス）教科教育長、イギリスのシェフィールド大学の韓国語学科の講師も勤めておられます。韓国語はもちろん、英語もご堪能ですので、講義では少し英語をまじえてお話になるかもしれません。日本語もご存知ですので、日本語で質問してもご理解いただけます。基本は韓国語でお話いただき、趙先生に通訳をお願いすることになります。

暑い時期ですので、中身はもちろん充実して素晴らしい内容になることを祈っておりますけれども、あまり無理をせず、ゆっくりとリラックスして楽しい講義になることを願っております。それでは、充実した楽しく有意義な講義になることを期待しております。どうぞよろしくお願いいたします。

T：はじめまして。カン スンヘです。田中先生、お招きしていただきありがとうございました。大切な経験になると思うので、みなさんもどうぞよろしくお願いいたします。韓国の教育事情や教育課程、教育評価をこれから紹介しますが、みなさんにとって有意義な時間になってほしい

と思います。

普段の講義ではあまり自己紹介はしないのですが、ここは日本ですので皆さんの自己紹介をお願いします。簡単に自分の研究となぜこの授業を受けたのか、について話してください。また、ユンドンジュという有名な詩人のマウスパッドを皆さんへのお土産に持ってきました。

■授業の概要説明と自己紹介

- S 1 : D 1 の〇〇です。イギリスの 20 世紀初頭の算数・数学教育を研究しております。この授業を受講する理由は、韓国の大学入試は包括的に学生を評価するということを聞いており、興味を持っているからです。よろしくお願いします。
- S 2 : M 1 の〇〇です。入試制度を研究しています。修論で海外の入試制度を研究したいと考えているので、この授業を受講させていただきました。よろしくお願いします。
- S 3 : M 1 の〇〇です。オランダの学校評価を研究しています。個人的に韓国に興味があるので、この授業を受講させていただきました。よろしくお願いします。
- S 4 : M 1 の〇〇です。読解力に興味があり、認知心理学で行われてきたテキスト理解研究を授業でいかしていくとどうなるのかを研究しています。よろしくお願いします。
- S 5 : 中学校の教師で、M 1 の〇〇です。学力は何かを考えています。よろしくお願いします。
- S 6 : 学部 3 回生の〇〇です。研究はまだ決まっていなくて、色々なことを知るためにこの授業を受講しました。よろしくお願いします。
- S 7 : M2 の〇〇です。アメリカの障害児教育を研究しています。日本と比べ、韓国はアメリカの障害児教育を早く柔軟に取り入れているようなので、そこから韓国の教育にも興味を持ち参加しました。よろしくお願いします。
- S 8 : D1 の〇〇です。自分の研究は音楽教育です。韓国の英才教育にも興味を持っています。よろしくお願いします。
- S 9 : M 1 で中国からの留学生の鄭です。研究テーマは日本の生活綴方と中国の生活綴方です。韓国の教育課程にもすごく興味・関心を持っていますので、参加させていただきました。よろしくお願いします。
- S 1 0 : ～韓国語で自己紹介～
- S 1 1 : 金沢大学の〇〇です。もともと韓国の高等教育全体に関心があり、初等・中等教育全体を見渡した上で高等教育を見たいと考えています。明日の大学入試制度についてのお話も楽しみにしております。
- S 1 2 : コラボレーションセンターで助教をしている〇〇です。在日コリアンの教育のことも研究しております。よろしくお願いします。
- S 1 3 : 学部三回生の〇〇です。研究はまだ決まっていません。韓国の教育を知ることで、日本の教育を知る役に立つと思って、この授業に参加しました。よろしくお願いします。
- S 1 4 : 生涯教育学講座M 1 の〇〇です。小学校と地域の連携から住民がどういうことを学んでいるかを研究しています。この授業は、研究と関連しているわけではありませんが、研究室にいる在

日の方のお話を聞いて韓国に興味を持ち受講しました。よろしくお願いします。

T : 昨日からすごく緊張していたので、皆さんの紹介を聞いて少しほっとしています。日本の方への日本での授業は初めてなので緊張していたのです。京都大学は立派な大学で知られていますし、優秀な方がたくさん集まっているということをお聞きしています。韓国の教育に興味を持っている学生さんもいますので、これから頑張って講義をしていきます。

今日と明日、教育課程や遂行評価、大学入試について授業をします。今日話をする教育課程については難しいところがあり、韓国人でさえつまらないという人もいますので少し心配しています。個人的な意見ですが、韓国人は、日本人が持っている歴史に対する姿勢、考え、意識などを大切に思っています。韓国人も日本の歴史に対して勉強するべきだと思っています。これから韓国の教育課程の歴史について授業をします。途中でわからないところがあれば、自由に質問をしたりコメントをしたりしてもかまいません。始めます。

■「韓国の教育課程変遷」についての授業

スライド 1

T : 韓国の教育の歴史は主に教育思想と教育制度を中心に展開されています。最近ようやく韓国人も韓国の教育課程に関心を持ってきました。しかし、アメリカや日本に比べると、研究としてはまだ足りないところが多くあります。もちろん韓国の教育課程の歴史を体系的に整理するのは簡単なことではありません。特に韓国では戦争が2回もあったので、昔の資料や記録が保管されていないのです。そのため、教育課程の歴史についての研究をするのはすごく難しいことなのです。今から一緒にみる資料は、韓国の国が出している国家水準の資料です。これを概略的に一緒にみていきます。

スライド 2

T : 教育課程については、大きく2つに分けて授業をします。1番目は過去の教育課程、2番目は現在の教育課程です。なお、今は初等学校といますが、昔は初等学校のことを国民学校といました。

スライド 3

T : 特に初等学校、中学校、高等学校を中心に教育課程をみることにします。過去の教育課程というのは1次～6次の教育課程です。そして現在の教育課程として7次をみます。

スライド 4

T : 1945年第二次世界大戦が終わり、その後アメリカ軍は韓国教育委員会を組織しました。そのなかで、「新朝鮮人のための教育」を伝えました。それまで韓国には日本との戦争がありました。（そうした日本帝国主義的色彩をなくすため）アメリカ軍は、韓国で先生が教える時には日本語ではなく絶対に韓国語で教えるように、また韓国の利益に反することはしないようにしました。戦争が終わった直後であるため、平和と秩序が一番重要な教育目標としてあらわされました。中でも初等学校と中学校における教科編成と時間配分について、発表しました。

特徴としては韓国語で授業が始まりました。また、それまでは日本の影響で修身科があったのですが、それが廃止され、新たに民主的な市民を育成するための公民科が採用されました。さらに、歴史が教えられるようになりました。中等教育では1週間に32～34時間程度の授業がなされました。国語と数学、英語が重点的に教えられるようになりました。

スライド5

T：1946年～1954年までを指導要綱期としました。1946年、教授要目制定委員会が組織され、教科書が作られました。教授要目とは先生がどのように教えるのかを詳しく書いている文書です。この時期の特徴には3つあります。1つめの特徴は、教科の指導内容が詳細に書かれていることです。学生の基礎能力がとても大切にされていました。2つめの特徴は、教科が分科主義を採択し、体系的な指導が行われたことです。3つめの特徴は、「弘益人間」という教育理念です。「ひろくこの世の中で人間の生活を豊かにする」という意味です。愛国心と民族を愛する教育が強調されました。日本の影響が強かったので、その影響を排除するような努力が行われました。

この時期、教科の指導内容が詳細に書かれているという特徴がみられます。しかし、実際中身をしてみるとトピックだけが書かれており、実際に教師が教授目標や指導をどうするのかということについての詳しい説明はありません。そのため、個人的には、そこが問題だと思っています。

スライド6

T：第1次教育課程時期は1954年～1963年になります。第1次教育課程は1954年の文教部令第35号で決められました。初等学校と中学校、高等学校、そして師範大学が新しくできました。この教育課程は各学校の教科目、及びその他の教育活動で編成されています。この時期は「教科課程時期」または「教科中心教科課程時期」と呼ばれています。教育課程は教科中心で編成されていましたが、使われていた教科書は生活中心になっていました。教科課程においては、反共教育、道徳教育、そして実業教育が強調されました。

スライド7

T：スライドでは、第1次教育課程の特徴が、初等学校・中学校・高等学校に分けて述べられています。これを中心に今から説明します。スライドの一番上にある初等学校においては、教科活動と特別活動の2つの領域で編成されていました。教科は8教科で構成されていました。1963年には、年間35時間を使い道徳教育に力がいれられていました。

中学校も初等学校と一緒に教科活動と特別活動の2領域に分けられていました。必修教科と選択教科がありました。必修教科は8教科、選択教科は実業・家庭、外国語、その他の教科がありました。中学校においても道徳教育にも力がいれられていました。

高等学校も中学校と一緒に、教科活動と特別活動の2つに分けられていました。時間配分に関しては、地域社会の実情に合わせて配分するようにされていました。高等学校の教科活動にも、必修教科と選択教科の2つがありました。高等学校には、人文系の高等学校と実業高等学校がありました。実業高等学校では、専門教科もありました。

スライド8

T：第2次教育課程時期は1963年～1973年までの10～11年間です。康先生はこの時期小学生～中

学生でした。第2次教育課程は1963年文教部令で決められました。第1次教育課程では師範学校ができましたが、この第2次教育課程においては実業学校ができました。第1次教育課程は教科中心で作られていましたが、第2次教育課程では、学生の経験や生活という意味も含まれるようになりました。韓国教育課程は何回も改定されていますが、昔は10～11年に1回、その後は6年に1回改定されています。

ここでは、教育課程の内容と組織、運営についてみることにします。教育課程の内容においては、地域性、生産性、有効性が強調されていました。特に自主性、学生が自主的に教育活動を行うことが強調されていました。2番目の生産性に関しては、実際の生活をもっと豊かにするために実業や仕事、科学技術の教育が強化されていました。3番目の有効性においては、教育と実業の連結、つまり学校と社会をつなぐようにされていました。教育課程運営では、特に地域性が強調されていました。特に（たぶんタイラーの影響だと思いますが）学生の学習経験と地域社会が重視されていました。今のままでいいですか？もう少しゆっくり話した方がいいですか？ここまですべて質問はありますか？

S9：スライド6に出てくる反共・道徳教育とは何でしょうか？

T：本当に一生懸命聞いてくれていますね。質問ありがとうございます。これは昔の話になります。1945年戦争が終わりました。しかし、韓国は1950年にまた北朝鮮と戦争をしています。共は今の北朝鮮です。当時は日本に対しても良くないイメージがありましたが、この時期は北朝鮮のことを恐れていました。反共というのは北朝鮮に対して反する行動をする、警戒するという意味です。韓国においては特別なそういう状況がありました。他の国ではあまりみられません。韓国の政治と関わっていることです。韓国では反共教育、北朝鮮に対する教育も行われたのです。韓国の本当の民主主義は1980年代以降になります。それ以前は北朝鮮に対して警戒する、という反共教育が行われていました。

T：中国では反共教育というのはないんですよね？

S9：ないです。

T：韓国の政治が反映されているところだと思います。

趙先生：私もその時期に教育を受けていないのでわかりません。

スライド9

T：それでは、1963年～1973年の第2次教育課程をみてみます。特に編成・運営について初等学校・中学校・高等学校をみてみます。第1次教育課程は教科活動と特別活動に分けられていました。第2次教育課程の初等中等教育においては、教科活動と特別活動に加え反共教育や道徳活動なども含まれています。それまで時間配分は教科別に年間時間数で示されていたが、ここでは教科別に週あたりの時間数で示されています。また、自立性も強調されています。さらに、社会生活科が社会科に改称されました。

中学校においても初等学校と同じように、教科活動、特別活動、反共教育と道徳活動が行われていました。また、中学校教育は普通教育という特性であると規定され、選択教科は無くされました。特別活動は全体の8%以上とされていました。授業時間も50分から45分へと短くなり、

社会生活科も社会科に改称されています。さらに、ここでの特徴として、男女ともに技術という科目が新設されました。この時期には、反共教育と道德活動の時間が週 1 時間から週 2 時間に拡大され、特別活動も強調されていました。

この時期、(康先生は) 初等学校に通っていましたが、国民教育憲章というのがありました。A5 用紙の 3 分の 2 くらいの量で、教育についての色々な意味がこめられているものです。初等学校で子どもたちはそれを暗記し、毎日それをみんなで一緒にいうようになっていました。内容は、自分たちはこの国のために生まれてきた、などといった意味でした。

高等学校のところに入ります。ここでは共通科目とともに選択課程がありました。選択課程は、人文課程、理教課程、職業課程の 3 つに分けられていました。大学の場合、単位と呼ばれるには、韓国では 18 週必要であると示されています。しかし、中学校と高等学校の場合は 16 週と 17 週と示されています。1969 年、教育課程に対して部分的に改定がなされています。この時期、高校において教練という新しい科目ができました。教練という科目は特別活動で、高校生を中心として国を守るための訓練を行うものでした。これは、週 12 時間というかなりの時間行われたようです。また、この時期漢字教育がなくされ、第二外国語としてスペイン語が追加されています。

スライド 10

T : 第 3 次教育課程は 1973 年～1981 年です。この時期は 10 年間ではなく 7 年間です。第 3 次教育課程は 1973 年、そして 1974 年の文教部令で決められています。それまでの韓国の教育課程は国が定め、それを一方的にトップダウン形式でおろしていました。しかし、この時期は、教育課程審議会という委員会が作られ、2 年間実験が行われ、そこで okay サインが出てから教育が決められることになりました。

この時期の教育課程は、1960 年代アメリカにおける学問中心の教育課程理論をもとに作成されました。当時、社会が大きく動いている時期だったため、そうした社会的背景をもとに、アメリカの学問中心の教育課程論が取り入れられ、何より学生たちが自主的に勉強することが重視されました。一方的に教えるのではなく学問の知識の構造を教え、詳細なところは学生自らが行うようにされました。この時期には、社会的な貢献度も教育目標として定められていました。

スライド 11

T : この時期の編成、運営を初等学校、中学校、高等学校についてみます。この時期、反共・道德はなくなり、ただの道德に変わりました。第 1 次の時期のようにまた戻ったのです。小学校 5～6 年では、歴史の教科が設定されました。また、授業の時間は 40 分～45 分になりました。

中学校の場合においても反共教育がなくなりました。歴史が重視され、1 つの教科として独立しました。選択教科の実業・家庭科という教科のうち、「女性技術」が「家庭科」に変わりました。中学校の教科は必修教科が 12 教科で、選択教科は実業・家庭などでした。

高等学校の編成についても、教科活動と特別活動に分けられています。教科活動は必修、必修選択、課程別選択に分けられていました。高校の場合は人文系と理数系、職業課程 3 つに分けられていました。職業課程には、芸能、体育、外国語、その他のものが含まれていました。この

時期（康先生は）高校生でしたが、科目数が35でした。特別活動には12時間配分されていました。必修科目はⅠ、過程別科目はⅡと分けて示されていました。

スライド 12

T：第4次教育課程は、1981年～1987年の6年間です。1979年10月26日、パク・チョンヒ大統領が暗殺されました。80年81年はチョン・ドゥファンという大統領の時期になります。第4次教育課程は1980年以降になります。それまでは、文教部で全部教育課程を作っていましたが、この時期には、韓国教育開発院に研究が依頼され、そこで教育課程が作られるようになりました。この教育課程の目的、つまり期待されている人間像としては、健康的な人、能力がある人、自主的な人、道徳的な人が強調されていました。

この時期の改定の方針は（スライドの①で示されていますが）、以前の問題点を補完するという立場で開発されました。問題点というのは（スライドの）カッコの中で示されています。以前の教育課程は暗記中心だったので、学ばなければならないことがすごく多かったのです。しかし、教育の量を少なくするような努力がなされました。

皆さんもご存知のように、韓国では一発試験の大学入試があるため、私教育がすごくなされています。それが今も問題として言われています。特に1980年代は大学生が小・中・高校生をアルバイトとして教えていましたが、それが全て禁止されました。（スライドの）②と③のところにも（改定の方針の）特徴が書かれているので、少し読んでみてください。

また、この時期の教育課程の特徴として、総合的ということがあげられます。その中身としては教科中心、経験中心、学問中心、人間中心が強調されていました。さらに、80年代は未来に対する教育課程に大変興味を持たれるようになりました。特に80年代は人間中心教育、学習者を中心とする教育が教育課程に反映されていました。

スライド 13

T：それでは1981年～1987年の第4次教育課程の編成及び運営をみてみます。先ほどと同様に、初等教育は、教科活動と特別活動の2領域に分けられていました。それまでは、特別活動が4領域で分けられていましたが、この時期に2つの領域へと縮小されました。このように、特別活動は、少し縮小されるという傾向がありました。ただし、第4、5、6学年に対しては時数が2時間以上増えました。

韓国の場合、教育課程を国が定めているので教育運営指針というものがあります。その計画運営指針が、初めて計画的に計画、指導、評価、その他の4つに分けられました。中でも、特に評価指針が開発され、評価が大変重視されるようになりました。

中学校も教科活動と特別活動の2領域で分けられていました。この時期、教科に変化の傾向がみられました。女性に対し、家庭という科目が作られました。中学校3年生に、特別活動として家庭が教えられました。ただし、1、2年生には教えられませんでした。また特別活動のところを見ると、学級活動やクラブ活動、学校行事に参加するようにもなりました。中学校と高等学校の差異としては、高等学校には「学徒護軍団」というものがあげられます。

高等学校の場合は、普通教科と専門教科の2領域で分けられています。普通教科は、全体の

40～60%でした。教育内容については、全体の履修単位が縮小される傾向がありました。1年間で 201～216 単位が教えられていました。自由選択科目があり、8科目まで選択することになっていました。選択科目には、哲学や論理、心理学などもありました。スライドの中にはありませんが、科目 I とされている科目は全て必修として受けなければなりません。ここまでで、何か質問はありますか？

S10：第2次教育課程の際、漢字教育が廃止されています。その後また再開される理由は何ですか？

T：すごくいい質問だと思います。私は個人的に外国語としての韓国語を教えています。しかし、現在の初等中等学校、高校には漢字教育はありません。

趙先生：私も受けたことはありません。

T：個人的な意見ですが、漢字が分からないとその単語の意味が分からない場合があるので、漢字教育が重要だと思っています。ハングルでは、音が一緒なので区別がつかない場合があります。それを漢字で示すと意味が違えることがすぐに分かるのです。しかしながら、漢字教育を受けてない人たちはその区別ができません。特に、今までみてきた第1次～第4次教育課程では、漢字教育は廃止されたり生まれたりしています。これはなぜかという、その時期は韓国の社会的事情が不安定な時期であり、歴史や政治、社会の色々な影響があったためです。また、韓国の場合は大統領制なので、その時の大統領がどのような教育方針を持っているのかによって教育課程が変更される傾向があるのです。例えば、パク・チョンヒ大統領は軍事的な力を持っていたため、軍事的な学徒護国団をいれるなどの傾向がありました。他に質問はありますか？

S12：第1次第2次教育課程のところで、地域性ということが出ていました。その点は、日本の教育課程との比較が面白いところだなと思っています。それについて、もう少し聞かせてください。

T：教育課程運営のところで、地域社会ということが含まれていますが、特に7次においては、教育の中に地域という概念をいれることがとても大事であるとされています。韓国の場合、主にソウルを中心に教育が行われています。第1次2次教育課程のとき、初めて地域ということが視野にいれられました。その地域とはソウルからみるとあまり良くない地域とされているところのことです。そうした地域の特性を教育課程の中にいれるということが初めて考えられたのです。ただ（康先生は）、その時期は表面的に地域化ということが教育課程にいれられただけだったと考えています。

韓国では主にソウルを中心に教育が行われているので、地域性が教育課程に入れられたという点は変わりました。しかし、実際中身としては、中央であるソウルが中心で、表面的な建前として地域性がいれられた、ということがあります。

趙先生：S12が考えている地域は、少し違うかもしれません。韓国ではソウル以外の地方を指します。

スライド 14

T：第5次教育課程は1987年～1992年と5年しかありません。短くなりました。第5次やその次の第6次においては、先ほど述べたように大統領がどういう分野に関心があるか、によって教育課程内容が変わります。韓国では本当の民主化というのは1986年以降になります。第5次教育課程は1987年以降になります。この教育課程の目標においては、健康的な人、自主的な人、創造

的な人（韓国語では創意的）、そして道徳的な人が強調されています。教育課程の方針としては適正化、内実化、地域化が示されましたが、内容は第4次教育課程の骨をそのまま維持していました。そして、先ほどの質問にもありましたが、地域化がすごく強調されています。これは、ソウルを中心とするのではなく、教育課程の効率性を重視するために地域性を取り入れたのだと思います。そして基礎教育を大変強化しました。韓国の場合1980年代後半以降、情報化社会に対応する教育が強化されていきました。またこの時期には、今までの教育課程（第1～4次）の問題点に対する反省とこれからの教育課程に対する効率性が考えられるようになりました。

スライド15

T：先ほどと同様に初等学校・中学校・高等学校について編成と運営をみてみます。第1次～4次までは、国語、算数、社会などといった科目でしたが、80年代後半以降そうした教科を統合した別の教科が生まれます。算数はただの算数ではなく「算数を学ぶ法」へ、韓国には「正しい生活」という教科がありますがその名前が変わり「生活のガイド」へ、国語もただの国語ではなく、話す・読む・聞く・書くといった領域で分けられるようになりました。それまではABCDなどで評価が行われていましたが、第5次からは子どもにあわせ、子どもの活動や進歩、どのように発展しているかが文章化され評価が行われるようになりました。

韓国では特殊教育といいますが、障害者のための教育にも関心が持たれるようになりました。また、年間授業時数が増加され、週の時数も増えました。さらに特別活動運営の現実化、つまりそれまでは自分の生活と離れた特別活動でしたが、学んだ知識を学校以外のところで発揮できるように実際の場面が設定され、その場面を中心に教えられるようになりました。

中学校では科学教育が強化されるようになりました。数学と科学の時間が増やされました。男女の役割についても考えられるようになり、男性は技術、女性は家庭という教科を受けるようになりました。

先ほど述べたように第5次教育課程は第4次教育課程の骨をそのまま持っているので、高等学校の場合は一般と実業があります。一般は、人文と理数系で分けられており、実業は、職場のためのところと現在働くためのところ、といった領域で分けられていました。実業系と仕事のための学校は一般校とは違う教育課題を持つようになりました。この時期の特徴として、特殊目的学校というのがあります。特殊目的学校とは、例えば、科学や外国語を重視し、それを専門とするような学校です。その他の教育課程はほぼ同じですが、例えば外国語の時間を増やしたり、科学の実験の時間を増やしたりされます。科学や芸術のための高校も生まれました。また、この時期には、科目によって教科書が作られていましたが、一方的に暗記するようなものではありませんでした。学生を中心とするような立場が教科書の中で見られます。

これから昼ごはんの時間にしましょう。その後再開してから、第6次教育課程以降を見ていきましょう。何か質問はありますか？延世大学でも（康先生は）教育課程を教えています。これを教えるとみんなつまらなさそうな顔をしています。韓国の学生は昔の教育課程には興味がないと言っています。しかし、みなさんはちゃんと聞いてくれて心からありがとうございます。それでは、昼ごはんにしましょう。

第一日目 午後の部「韓国教育課程変遷」の続き

通訳：趙 卿我（教育実践コラボレーションセンター助教）

記録：奥村 好美（教育学研究科修士課程 1 年）

※康 承恵先生（以下、T とする）、他の先生方を含め受講生（以下、S とする）

■「韓国教育課程変遷」についての授業の続き

スライド 16

T：これから、第 6 次教育課程についての授業を始めます。第 4、5、6 次教育課程は基本的に類似しているので、あまり大きな変化は見られないと思います。ただ、もしかすると日本人から見ると大きく変化しているように見えるかもしれません。

第 6 次教育課程は 1992 年～1997 年までです。先ほどと同様に、教育の目的は健康的な人、自主的な人、創造的な人、道徳的な人です。第 6 次教育課程の改定には、主に 4 つの傾向が見られます。1 つめは、教育課程決定の分権化です。ソウルを中心とした教育課程から地方へも目を向けるようになりました。韓国では、市や道（道とは日本での県）すべてに教育庁があります。それらと学校との連携もみられます。2 つめは、教育課程構造の多様化です。特に、教育課程の構造において、履修課程や教育課程の多様化が見られました。必修科目は縮小され、学生自ら選択する機会が広げられました。3 つめは、教育課程内容の適正化です。学習の量や水準が調節されました。特に教科目に関して学生の学習量が多かったのも、その量を減らすような改定がみられました。4 つめは、教育課程運営の効率化です。特に学生の適正や学生がやりたいこと、学生の能力、学生が自分で考えている進路に合わせた基礎教育という点に改定がみられます。さらに、教育評価の方法について改善がみられます。

第 6 次教育課程の特徴は、スライドにあるように示されます。編成や運営権が調整され、分権化が行われます。国家レベルでの教育課程、地域レベルでの教育課程、学校レベルでの教育課程の 3 つがあります。国家レベルの教育課程は、全国共通の基準、一般的な基準としての役割を担います。地域レベルの教育課程では、学校の教育課程編成や運営を支援するため、学校と国家の連携を担います。学校のレベルの教育課程は、各学校に合わせて作られた教育課程です。

スライド 17

T：第 6 次教育課程の編成および運営を初等学校・中学校・高等学校についてみます。ここでは今までみてきたような教科や特別活動に加えて「学校裁量の時間」があります。基本的な生活習慣や礼儀の教育が重視されました。特に、1、2 年生低学年教科の統合がみられます。それまでは算数という言葉が使われていましたが、数学という言葉が使われるようになりました。韓国ではもう算数という言葉は使われていません。日本ではどうなっていますか？

S：小学校では算数で、中学校以上は数学です。

T：韓国では小学校でも全部数学です。中学校では、週当たり授業時間が 34 時間設定されました。歴史（韓国では「国史」）は、社会科の下位科目とされました。また、実業と家庭という科目が男女平等の必修科目として指定されていました。

高校では、学生の多様性に合わせ、学生が自ら選択する権利を与えていました。高校 3 年の間に 204 単位を勉強しなくてはなりませんでした。科目は 12 科目でした。この時期、教育課程において、高校の時から未来社会に対して準備するという傾向がみられました。

スライド 18

T：今まで、第 6 次までの教育課程、過去の教育課程を見てきましたが、これから現在の教育課程、1997 年以降を見ていきます。

スライド 19

T：1997 年から現在までは、この第 7 次教育課程を使っています。第 7 次教育課程は、21 世紀の世界化、情報化時代に合う創意的な韓国人の育成を目的としています。1995 年 8 月に教育改革委員会が教育課程特別委員会を作り、小・中の教育課程を作成しています。第 7 次教育課程では（スライドの）①から⑤の人間像を追求しています。1 番目は、個性です。個性というと日本ではあまり良くないイメージがあるかもしれませんが、韓国では創造的という意味で個性という言葉を使います。2 番目は、創造的な能力を発揮する人ですが、これはあくまでも既存の学問を学んだ上での創造的な能力を発揮する人を意味しています。3 番目は、幅広い教養をもとに進路を開拓する人です。4 番目は、韓国の文化をもとに新しい価値を創造する人です。5 番目は、民主主義における市民として共同体発展のために貢献する人です。

構成方針は（スライドの）以下の 4 つがあります。1 番目は基礎、基本的な学習能力の育成です。2 番目は、教科内容の量と水準の適切化です。ここにおいて国民共通基本教育課程と選択中心教育課程があります。選択中心教育課程には、水準別教育というものがあり、この水準別教育がとても大事にされています。3 番目は、地域教育庁、韓国では日本における県にあたるものや市にも教育庁があり、そこでの教育課程、つまり地方に合わせた教育課程がとても重視されています。4 番目は、教育の質的改善のための、定期的な教育課程の評価体制の構築です。

スライド 20

T：それでは、第 7 次教育課程の理念と基本方針について具体的に見ていきます。基本的な構造は、国民共通基本教育課程と選択中心教育課程の 2 つに分けられています。日本は小学校中学校が義務教育だと思いますが、第 7 次から韓国では初等学校 1 年生から高校 1 年生までの合わせて 10 年間は国民共通基本教育課程の時期として設定されました。義務教育とはまた別の概念です。全ての国民が小学校 1 年生から高校 1 年生までは基本として教育を受けなければならない時期と設定されました。この 10 年間には、教科だけでなく裁量活動や特別活動も含まれています。教科は全部合わせて 10 教科で編成されています。国語、道徳、社会、数学、科学、男性は技術で女性は家庭、体育、音楽、美術、英語を基本とする外国語の 10 教科です。初等学校 1、2 年生の教科には、次のようなものがあります。私たちは 1 年生という教科、国語、数学、楽しい生活、正義論という知識とともに社会的な概念を勉強する教科です。また、楽しい生活の中には美

術や音楽が統合されて含まれています。裁量活動とは、教科の裁量活動と創意的な裁量活動に分けることができます。特別活動は学校に適応するため、慣れるための活動、自分を開発する活動、ボランティア活動、学校の行事に参加する活動などがあるようです。

(スライドの) 2 つめですが、学力水準別教育課程が導入されました。韓国語では水準別教育課程とありますが、学力という言葉をつけた方が分かりやすいと思うので学力水準別教育課程とあります。学生個人の能力、個人が持っている興味、他の人にはない自分だけが持っている能力を開発するため導入された教育課程です。学生の個性に合わせ、未来の潜在力、つまり今持っている知識だけではなく勉強した後にその子が発揮できる能力のことですが、この潜在力を中心に教育が行われています。水準別の教育は、教科をどのように教えるのかによって違いがみられます。段階型や、もともとできる子をもっとできるようにする進化型、あまりできない子に補充を行う補充型があります。例えば、数学や英語は段階型で教えられます。国語や社会、科学、小学校の英語においては進化型や補充型で教えられます。高校 2、3 年生の選択中心教育課程も、水準別に教えられます。

(スライドの) 3 つめですが、裁量活動の新設、および拡大がみられます。裁量活動は、学生が自ら勉強し学習活動を行うというイメージのものです。何より創意的な教育のために導入されました。

4 つめは、質の管理センターの教育評価体制の確立です。ただし、第 5 次第 6 次においても、教育の質管理は重視されてきました。今までは国家がトップダウン形式で教育課程をやってくださいという状況でした。第 7 次からは学校現場でその教育課程が本当に必要か、運営する上で何が問題なのかを考え、質として管理しています。教育の質管理をするため、実際に現場での学生の学力評価や成就度評価という学力評価があります。さらに学校がきちんと学生を教えているのか、教師はどういう分野を教えるのかというように国が学校を管理する評価があります。教育課程も学校別に評価されています。

5 つめは、教育課程の分権化です。教育機関及び教育行政の役割が分担されています。地域においても、教育課程に力を注ぐようになりました。

6 つめは、教育課程運営における柔軟性の増加です。教科の特徴や裁量活動、特別活動などにおいて、学校がその学校に合わせて柔軟にそうした時間を使えるようになっています。例えば、地方では 2、3 月などに農村が忙しくなります。その時期には特別活動として農村で働くようにするなど、学校の運営に合わせて時間を使えるようになりました。

スライド 21

T : それでは編成および運営を、初等学校・中学校・高等学校についてみます。初等学校は、教科、裁量活動、特別活動で編成されています。この編成は中学校でも全く同じです。裁量活動においては、基本知識として勉強しなければならないものもありますが、学生の個人的な要求に合わせて裁量できるような活動もあります。初等学校の裁量活動が強化され、学校が自分の学校はこういうことをやりたいといえ、その学校に合った裁量活動ができるようになりました。初等学校の学力水準別教育課程においては、数学では段階型で行われています。そこでは、数字ではなく

「ア」や「イ」などの文字で評価がなされます。「ア」が1～6や「イ」が7～12などのようにあらわされます。数学が段階型である一方、国語、社会、科学、英語は進化型、補充型になっています。先ほど算数を数学としたと述べましたが、第7次では自然を「科学」という名前に変えたり、英語を「外国語」と改称したりしました。また、教育課程の指針を通して、特に「直接的な体験活動」が強調されています。そして、特に初等学校では正しい国語使用能力に力がいれられています。

中学校における教育課程の変遷は、初等学校と全く同じです。裁量活動が新設され、教科裁量と創造的な裁量に分けられています。どちらかというと創造的な裁量に力がいれられています。教科裁量においては、教科の進化や補充が行われます。基本的な知識に関するものです。創造的な裁量では学生自ら関心を持っているところや学生が要求するところに力が入れています。学力水準別教育課程においては、数学と英語は段階型、国語、社会、科学は進化と補充型になっています。先ほどみたように、それまでは男性の場合は技術や訓練、女性は家庭と分けられていました。第7次教育課程では、必修として「技術・家庭」という1つの科目に男女一緒に参加することになりました。また中学においては、以前は英語だけが外国語として扱われていましたが、第7次教育課程からは英語以外の第二外国語も必修になっています。

実は第7次教育課程の中で最も革新的なのは、高等学校です。特に2、3学年では選択中心の教育課程を編成しています。小学校1年生から高校1年生まで国民共通基本教育課程として、全国民が義務として勉強しなくてはならなくなった影響で、高校1年生の教科科目は縮小されています。裁量活動は、小中高全てにおいてなされています。高1の裁量活動は10単位です。国民共通基本教育課程で必須の単位は4～6単位です。選択中心教育課程でも4～6単位の取得が必要です。創意的な裁量活動においても、2単位取得が必要です。高校においても、水準型教育課程では数学や英語は段階型で教えられています。(スライドの)中学校の3つめのところで見ましたが、国語、社会、科学は進化補充型です。高校と中学校は同じです。これらをまとめて、高校では科目選択型水準別教育といわれています。これらの科目の分類として、人文社会があります。人文社会には国語、道徳、社会があります。また、数学群という分類には、科学、数学、男女共通になった技術・家庭があります。

芸術、体育、音楽も日本と同様にあります。もちろん外国語もあります。また、教養ということで漢字やマナー、教練などがあります。教練においては、男性の場合は学生軍事訓練、女性の場合は看護師のように倒れている人がいたらどのように看護するのか、ということを行っています。人文社会のうち、国語、道徳、社会など全てを選んでも構いません。また、自分は国語と社会だけを選ぶ、など一部を選ぶことも可能です。教養においても同様で、自分は漢字とマナーだけを選び教練は選びたくないというのであれば、必修科目として受ける必要はありません。

スライド22

T: この第7次教育課程を3つに整理してみると、学力水準別教育課程、選択中心教育課程、裁量活動の教育課程になります。第7次教育課程においては、学力水準別教育がとても強調されました。特に2001年には教育人的資源部で、学生の個人的な適正や興味、個人の個性に合わせた授

業をおこなっています。教育の哲学、理念、学生が個人的に持っている潜在力などが重視されています。ここで強調されている水準別教育課程とは、学生の個人差や意味、学生が必要としているかどうか、などに合わせて教える、ということです。しかしながら、例えば創意的という概念が大事にされているにもかかわらず、実際はあくまでも学生の基礎能力水準に合わせて、つまり成績に合わせて水準別教育がおこなわれているのではないかと（康先生は）考えています。

しかし、水準別教育とは学生が本当に興味を持っていることに対して、教師が学生個人に合わせて教育を行わなくてはならないものです。基礎能力に合わせた水準別ではなく、本当に個人を考えて水準別教育を行う場合、個人に合わせた教育目標、内容、方法を考える必要があります。一方で、現実の場面で、本当に個人個人に合わせた教育を行うというのは難しいのではないかと思います。そのため、韓国の現在の状況においては、似たような同じくらいの水準の学生をグループとして合わせて能力別に分けて教えています。水準別教育という概念はすごく大切に、個人に合わせたすぐれた教育課程だと思います。しかし、実際の学校現場では似たような水準の子どもを集め上・中・下に分けて教えているという現状です。そのため効果や効率性が足りない、研究も足りない、そういう状況です。1997年からこの第7次教育課程は始まりましたが、水準別教育に疑問を持っている先生が多く、結局学生個人個人に合わせた水準別教育というのは非常に難しいのではないかとという問題点があげられています。

2つめは、選択中心教育課程です。選択中心教育課程とは、小1から高1までの基本課程を勉強した上で、高2、高3の学生が自分の進路や能力に合わせて選択できる課程のことです。学生の能力、興味、将来の進路にあわせて、自ら選択することができることで、学生中心教育課程とか科目選択型教育課程と韓国では呼ばれています。選択中心教育課程では、大学の進学、就職などの自分の進路に合わせた選択が行われる傾向があります。学生は自分の未来の進路などに大変興味があるので、例えば大学に入って専攻を何にするのか、そしてその専攻に合った勉強は何で、今何を学んでおくべきなのかということ、就職する場合には、今ここで学ぶべき科目は何なのかということを考えて選択するようです。そのため韓国では、高校における専門教育と呼ばれています。

韓国では、昔は大学は教養を勉強するところ、と言われていました。しかし、第7次教育課程からは教養だけなのか、それとも教養を得た上で就職するための進路との連携、職場教育を受けるためなのか、という点が考えられるようになりました。

みなさんは大学の使命は何だと思いますか？教養を教えてもらう場所と考えていますか？それとも進路のため、就職のため、職場教育のために大学に通っていますか？例えば、日本でも教育史をやっている方は今はあまり使えない知識を勉強しているのではないですか？京都大学の使命は何だと思いますか？韓国の大学は教養のための場所なのか、仕事のための場所なのか、どちらだと思いますか？韓国では小1～高1まで勉強した上で、高2、3で自分の進路について勉強する専門教育が強調されています。昔は大学で考えられていたことが今韓国では高校で考えられています。そのため、こうした問題が考えられるのです。

S：日本の場合、まだ将来のことを考えるのは大学という形になっています。しかし、今の大学は将

来のことを考える能力を養うより、学問のスペシャリストを作ろうとしています。それ自体は悪いことではありません。しかし、それだけにとどまっていると、将来に活かす能力が育まれず、頭でっかちの学生しか育たなくなってしまうのではないかと思います。

T: 高校では普通の教育や専門教育をどのような比率で扱うべきなのかを(康先生は)考えています。

S: 最近大学でコミュニケーション能力を培うべきと言われているけれど、それを大学が担うべきなのか、と思っています。やっぱり大学は1つの学問を4年間かけて研究するところではないでしょうか。

T: 先生もSさんと同じように大学では学問を中心に4年間ちゃんと勉強するべきだと考えています。

趙先生: 反対意見ありますか？

スライド 23

T: 3 つめは、裁量活動の教育課程です。裁量活動の教育課程については、学生と地域社会、また最近では学校の校長および教育官の人たちもみんな一緒に考えるべきだと考えられています。裁量活動は、第6次においても裁量時間設置という形でみられました。実は1970年頃にも裁量学習の日がありました。当時の「自由学習の日」においても、裁量活動の教育課程はみられます。実はこの裁量活動はフランスでもみられます。フランスにおいては、校長先生の責任の下で授業時間の10%を自由に使うことができる制度になっています。フランスでは10%改革運動といわれていますが、それが韓国の裁量活動の教育課程とつながっているのです。

第7次教育課程では裁量活動が強調されています。これは、校長の下自由に自律的に使うことができる時間です。しかしそれを行うためには、人、予算、組織、文化など色々な問題が発生するので、これを行うのは簡単なことではないのです。これまでは午前中は過去のエデュケーション、午後は現在の第7次教育課程をみてきました。最後に何か質問やコメントなどありますか？

S: 水準別教育は能力別クラスになっているということでしたが、日本の場合、能力別クラスは機会の平等を無視することになってしまうのではないかとということが問題になっていました。韓国ではどうですか？

T: 韓国でも日本と同様に、水準別教育を行うとき教師や学生の不満がありました。ただし韓国では教師、学生以上に保護者の力が強いのです。機会平等の問題があるのではないかと、という問題は教師、学生だけでなく保護者からもあげられました。現場においても水準別に分けることによって、できるクラスの子どもには問題はなかったのですが、できないクラスに入った子どもの学習意欲がなくなったりすごく落ち込んだりしてしまうという傾向がありました。

水準別の教育課程のせいで、より多くの子どもが塾に通うなど私教育がさかんになるという問題がありました。良いクラスに入るために、学校で学ぶ前に全て塾で勉強してしまう子どもが出てくるなどといった私教育の問題が生じました。学校の水準に合わせるのではなく、できる子ども達も塾に通うという傾向がみられます。水準別教育というのは、哲学としては良い概念です。しかし、現場において水準別教育を行うには課題や問題があると(康先生は)考えています。

ただし、水準別教育を肯定的な立場からみると、例えば上・中・可のクラスがある中で、水準別教育がなければ、ずっと上にあがることができなかった子ども達が、水準別教育で可のクラス

ですごく勉強した場合、可の中で一番上にあがることができます。こういった点で水準別教育を肯定的に見ることもできます。水準別教育は、運営の仕方によっては可能性がある教育課程ではないかと（康先生は）考えます。質問はありますか？なければ休憩します。

（休憩）

■「遂行評価」についての授業

T：（康先生は）韓国語を話しており、趙先生は日本語を話していますが、みなさんは韓国語と日本語の両方を聞いているので疲れているのではないかと心配しています。

■途中参加の方の自己紹介

S：高等教育センターの助教をしている〇〇です。元々比較の出身で、韓国の教育を研究しています。2006年に1年間韓国へ留学してから、ソウル大学で1年間交換留学へ行きました。それまで韓国語ができなかったので6ヶ月間延世大学で韓国語を勉強しました。先生が延世大学におられた時、自分も延世大学にいたということで縁を感じます。

スライド1～3

T：午前中は韓国の教育課程を勉強しました。これから韓国の遂行評価について話をします。日本ではパフォーマンス評価と訳されていますが、遂行評価という言葉を使います。まず遂行評価の概念を見ます。その後、（スライドの）6番目の遂行評価の事例として、数学と英語のビデオを用意しています。そのうち今日は英語科の遂行評価の事例をみてみます。撮影の専門家ではないので、少し撮影がブレています。（康先生が）こだわった点は次のことです。今までの韓国の授業は、できる子どもを中心とした授業でした。先生は京畿道というソウルから1時間離れたところにある小学校へ何も言わずに訪問し授業を撮影しました。あくまでも普通の小学生の授業を撮影したので、すごく面白いビデオです。英語は6年生、数学は5年生です。数学のビデオは明日見ます。

韓国でも近年、教育評価に対して関心が高まっています。なかでも、今日は遂行評価を紹介します。従来の評価では、知識の暗記が大切にされていました。しかし、現在は知識だけでなく、実際の状況に合わせて知識をどのようにあらかわすのが大切にされています。このような社会的な変化は学校のなかで何を教えるのかという変化になります。それだけではなく、教育課程の中での教授、教育評価の方式などにも色々な変化がみられます。

日本の評価はよくわかりません。しかし、韓国では従来は量的な評価、点数重視の評価でした。最近は学生個人に合わせた興味や経験が意味あるものとされ、創意力、問題解決力、高等精神力などが重視され、新しい評価体制として遂行評価を取り入れています。

遂行評価に対しては（スライドの）1から6まで見る予定です。遂行評価の概念、必要、方法、設計、課題、そして事例を初等学校を中心に見る予定です。今日は時間の関係上、遂行評価の概念と必要性、そして英語教育の実際の事例を見せます。それでは、遂行評価の概念に入ります。

スライド4

T：遂行評価とは、学生が自ら自分の知識や技能を表すために産出物（作品）を作ること、行動で表すこと、答えを構成することなどを要求する評価方式です。教師は学生の遂行評価を観察したうえで、産出物、作品について教育的な判断、つまり評価を行います。まとめていうと、遂行評価は観察と判断による評価と言われています。遂行評価は、知識だけでなく実際 **doing**、どのように行動をあらわすのかを大事にします。特に音楽や体育の分野で大切にされており、学習した知識だけではなくそれを行動でどのようにあらわすのかを重視した評価方法です。従来の評価では、中間試験や期末試験 1 回 2 回で点数で評価が行われていました。遂行評価は全過程を観察して総合的に評価を行う方式です。遂行評価は、韓国においては、認知的な行動特性と（アメリカでは含まれませんが）情意的な行動も含まれます。人間の全ての活動に対して評価する概念として韓国では理解されています。

スライド5

T：遂行評価の概念としては4つあげることができます。1つめは、代替的评价です。従来の選択型検査による評価体制と区別されます。選択型検査というのは1～4の中から選ぶというような形式でした。代替的评价はそれとは違う概念を示しています。2つめは、真正の評価です。なお、韓国では **authentic assessment** は「本当の評価」と呼ばれていますが、日本語では「真正の評価」と訳しました。真正の評価では、実際状況の中での問題解決力がみられます。真正の評価においては実際状況での問題解決力だけでなく、点数化される単純化された評価ではない高次の思考能力をも評価する上で重要な評価になります。3つめは、ポートフォリオ評価です。長期にわたって収集した学生の産出物、作品を重要な評価の対象としています。これは5年生の子どものポートフォリオです。借りてきたので、休み時間によかったら見てください。ここには遂行評価やその学習過程もみられます。全ての教科に対し先生たちはポートフォリオをつくり公開しています。4つめの直接評価です。これは学生の能力や技術を観察や面接を通して直接評価するものです。遂行評価は、従来の評価とは異なり、幅広い答えを要求しており、幅広い作品について学生の能力を測っている評価です。

スライド6

T：それでは遂行評価の必要性に入ります。現実社会では単純な知識を暗記するのではなく、その能力をどのようにあらわしているのか、特に個人の個性に合わせた人性や創意性を評価する新しい評価であります。このような現代社会で要求されている、子どもたちのための遂行評価は、代替的な評価として実行されています。

スライド7

T：去年(2009年)、白先生が（京都大学）にいらっしゃってシンポジウムや集中講義を行いました。白先生はアメリカから韓国に遂行評価を紹介し、みんなが分かるような形で一般の現場に広げた先生です。ここでは、その先生が1998年に書かれた本を通して遂行評価の必要性を紹介します。白先生の集中講義やシンポジウムに出た人が何人くらいいるのか確認したいので、手をあげてください。白先生の集中講義やシンポジウムに出た人に聞きたいと思います。白先生の授業を聞いて

て遂行評価をどのように理解していますか、日本のパフォーマンス評価と比べ何が違いどこが良い点だと思いますか？

趙先生：西岡先生がパフォーマンス評価の研究をされていますが、それをもとに韓国の遂行評価との違いなどありますか？自分はパフォーマンス評価のことをどう考えている、とかでも良いです。

S：韓国と比較してというわけではありませんが、日本ではまだパフォーマンス評価というと紙と鉛筆から離れてしまう全く別の評価、行動だけというイメージを持っている人がいる、という印象です。それに比べて、韓国では、必ずしも活動としてあらわすことを求めることが全てではなく、現実の文脈に近い問題を遂行することを求めるというように、きちんと定着できる形で広まっているという印象です。

T：とても鋭いお答えですね。韓国の白先生は 1998 年の遂行評価の必要性を 5 つにまとめています。

1 つめは知っている知識が適用可能かを把握するため、2 つめは学生の多様な個性や特性を考慮し妥当な評価を行うため、3 つめは継続的で総合的な評価をするため、4 つめは学習者にとって有意義な活動にすること、5 つめは教授・学習目標と評価内容を直接的につなげるためです。1 つめであげた、知っている知識がどのように適用可能かどうか、ということについては、認知的に知っていることも重要ですが、知っている知識を実際の場面でどのように行動であらわしているのかが重要であると白先生は言っています。

2 つめについてです。従来、月末や中間・期末の試験などで学生は評価されていました。これでは学生の個性や特性を評価することは難しかったです。しかし、遂行評価では学生の個性や特性を考慮し妥当な評価を行うことが可能です。従来の評価では、成就度、つまり学生がどのような知的領域を持っているかを評価するということですが、その水準を測ることはできませんでした。しかし、その知識を得るためのプロセスを評価することはできませんでした。また、そのプロセスの改善は教師にとって重要であるにもかかわらず、そういった概念はありませんでした。みなさんもご存じだと思いますが、形成的評価を行うためにも遂行評価は非常に重要です。つまり、教授学習過程を改善するためには個人の個性や特性を考慮した上で遂行評価を行うことが大切なのです。

スライド 8

T：3 つめについてです。従来の評価では教授学習は 1 度 2 度評価される程度で終わっていました。一方、遂行評価ではそれぞれの学生の個性、レベルに合わせて、継続的、総合的に評価することができるようになりました。遂行評価では、教授学習の結果だけでなくプロセスの中で収集した個人のできる領域とできない領域、つまり学生がどこでつまづいているのかを把握することができます。それを持続的総合的に評価することができます。

4 つめについてです。学生にとってとても有意義な活動をすることができます。(康先生も) 実際小・中・高のときには丸暗記して試験を受け、試験が終わったら全部忘れてしまうという学習をしていました。日本では違うかもしれませんが、ロボットみたいに暗記するような学習活動は意味がないと最近はいわれています。ただ暗記するのではなく、学んだ知識を実際の状況であらわしてみたり、あらわしたうえで自分が学習、習得し、それを理解したりすることが知識であ

ると韓国では考えられています。

5 つめについてです。教授・学習目標と評価内容を直接的につなげることができます。選択型検査では、高次の思考能力をはかることができませんでした。当時はそれで直接評価していると考えられていましたが、遂行評価の今の段階からみると、間接的です。今の遂行評価は直接行動を評価することができるといわれています。

韓国では、パフォーマンスアセスメントを遂行評価と訳しています。最初は直接評価、遂行検査など色々な言葉がありました。白先生が遂行評価という言葉を実地の先生に印刷して送ったことで遂行評価という言葉を使うようになりました。ここまで韓国の遂行評価の必要性や概念をみてきました。今から 6 年生の英語の授業を見ます。

■英語の授業ビデオ

T: 今から紹介する英語科の遂行評価は、京畿道というソウルから 1 時間くらい離れているところの普通の学校での授業です。(康先生は) 英才教育などはあまり好きではありません。全ての子どもに平等に学力を保障することを大事にしているのです。何もいわず突然授業に入り、英語の遂行評価がどのように行われているかを撮影したものです。優秀なものではなく、一般的な普通の授業です。

今からビデオをみますが、途中説明したり、質問がもしあれば答えたりします。この授業は **TT、Team Teaching** で行われています。アメリカ人の先生と韓国人の先生と一緒に授業を行います。単元名はプリントの一番上にのっています。未来形について勉強する遂行評価です。未来形について子どもたちがどのように遂行評価を行っているのかみることができます。プリントの左側に書かれているものをもとにネイティブの先生と韓国人の先生が評価を行います。特にネイティブの先生がこれをもとに評価している場面がビデオの中でみられます。

プリントの裏に 1 番から 32 番まで学生の名前が書いてあります。先生が主にみている評価の視点が横軸です。ネイティブスピーカーの先生は韓国語がそんなに上手ではないので、評価する際も全部英語で評価します。韓国人の先生は論述式で全部評価を書いています。ネイティブの先生はよくできる子には◎、普通の子には○、ちょっと足りない子には△をつけます。◎が 3 つ以上の学生は A、◎が 1 つで普通の○が 2 つの場合は B、◎と○がない場合は C というように、ネイティブの先生は評価しています。

最終的な評価は、韓国の先生が行うと思います。トピックは夏休みの間に自分が行うことです。それについて、英語で簡単に述べたり、質問したり、質問に答えたりします。準備として、学生は遂行評価を行うためのプリントを持っており、最初に書いてみます。そのように未来形を書くかどうかを確認したうえで、実際の場面で 2 人ペアで会話が行われます。プリントの右側は評価基準、ループブックです。良く出来た場合何がどのように良かったのか、普通の場合なぜ普通だったのかを韓国の先生が論述式で書きます。

先生たちは最初は全部英語で話しますが、聞き取れなかった子どもがいた場合、2 回くらい英語で言った後、その子ども達のために韓国語で指示を行います。

【授業ビデオの解説】

T：授業の最初に韓国人の先生が教室の前に出て英語で「先週何を学びましたか？」と述べ、学生たちが未来形であると答えます。次にネイティブの先生が「What will you do this summer?」と英語でいうと、学生たちが英語で「swimming, camping」などと答えます。実際に活動を行う前に先生が遂行評価の観点に対して説明をしています。未来形についての勉強をしているので、I will を使いその後は未来形でいなければならない、などです。

次に、採点基準を示しています。プリントの真ん中にのっています。学生が行うことをこのように評価します、というループリックを先に子どもたちに示します。先生が評価基準を示した上で、学生は実際に夏休みに何をするのかをプリントに書き、2人ペアで教室の前で英語の会話をするようになります。先生が「ペアの相手が答えなかったらどうしますか？」と聞くと、学生たちは「それならやめましょう」といっています。それに対して「相手が答えなければ、相手が話せるようにペアの人たちは手伝ってあげなくてはいいけませんよ」と先生はいっています。

最初、学生たちは一度書いてみます。全ての学生ができているかを2人の先生で確認することはできませんが、できる範囲で確認します。そして、2人の先生で活動ができそうかどうかを話し合います。学生たちが書き終わると、2人の先生がどのように評価するのかを話し合います。そして学生の前で実際に先生たちが会話を行い、会話の例をみせます。活動を行う前にプリントは全て回収されます。何もない状態で英語ができるかどうかが見られます。

会話例は次のようなものです。「夏休みの間に何をしますか?」「スリー山に行きます」「遊園地に行きます」などです。この後、学生たちが実際に会話をしていきますが、プリントを回収しているため、同じ答えがありません。学生たちは、自分ができる範囲で英語活動を行うのです。

子どもが2人ペアで教室の前に立ち英語の会話を行います。横でネイティブスピーカーの先生が全部評価をしています。今の場面では、自分が予期しない「コンピューターゲームをする」という答えが出たので、びっくりしてペアの子どもがとまってしまいました。ビデオの映像にはネイティブの先生が横で評価している姿しかうつっていません。しかし、韓国人の先生も横で評価をおこなっています。評価が難しいとき、先生たちは2人で話をしてクロス評価、相互評価を行います。

授業の最後にネイティブの先生が全体に対してコメントをいっていました。ネイティブの先生が英語で話した後、分からない子どものために韓国の先生が韓国語で話します。遂行評価はできたけれども、聞く時にうるさかったですね、といった内容です。

もちろん2人の先生は評価を行います。が、学生個人個人に対してそれは言いません。また、他の人がやっている時に子どもが練習をした場合、それは問題であるということがいわれていました。一番最初に行った学生は全然練習せずに活動を行ったのに、最後に行く学生が何回も練習すると不公平です。そのため、そういうことはしないように最初に先生は注意していました。

■質問やコメント

S：日本の教育課程はゆとりと学力をいったりきたりしています。韓国の子どもたちは学校に夜食を

持っていくと聞きました。今でもそのように熱心に勉強を頑張っているのですか。

S：韓国では、ゆとり教育はなかったのですか？

趙先生：ゆとり教育は日本のものですよ。

T：何をもって日本と韓国がそっくりだとおっしゃっているのか分かりません。韓国の立場から見ると、日本とアメリカの教育課程がそっくりであるようにみえます。日本は日本独自と思っているかもしれませんが、日本はアメリカの影響を受けており、日本韓国両方ともアメリカの影響を受けているのです。日本でみられるゆとり教育は韓国ではみられません。基礎学力に対して少し問題視された時期もありました。しかし、日本ほど深刻な問題はありませんでした。なぜかというところ、韓国では最近漢字の教育を行いません。実は、韓国語は学びやすい言葉なのです。日本では平仮名、カタカナ、漢字、英語、全てやらなければなりません。韓国では、韓国語だけで全て通じます。そういった要因もあるのではないのでしょうか。

T：(康先生は) 日本の小学校へ行ったことがないため、日本の小学校と比べて違うところや新しいところなどが聞きたいのです。

S：自分は日本の現場に関わる機会はありませんのでよく分からないのですが、ビデオを見て疑問に思ったのは、男の子は男の子、女の子は女の子でペアを組んでいるのはなぜでしょうか？

T：自分が学校に通っているときには、男女一緒に学ぶということはありませんでした。(康先生は) 2年生までは男女一緒でしたが、3年生以降は男女別クラスでした。今はそのようなことはないようです。それにも関わらず、なぜ男女ペアかといいますと、90年代くらいまで特にそうだったのですが、韓国では男の子が多いのです。これも韓国の文化だと思いますが、男子先行、つまり子どもを持つなら男の子を持ちたいという傾向があります。そのため、男の子の人数が圧倒的に多かったのです。それで男女ペアがきれいにつくれないため、男の子同士、女の子同士のペアだったのではないのでしょうか。

S：儒教の文化の影響もありますか？

T：儒教の文化の影響もあるでしょう。李氏朝鮮時代、男女7歳にして席を同じくせず、と言いました。おそらくそういった文化の傾向が残っていて、男女一緒に学ばないのではないのでしょうか。

S：午前に勉強した資料4ページにある学力水準別教育課程についてです。勉強できる子や上を目指したい子が塾に行くとおっしゃっていましたが、その場合、経済的に塾に行けない子は、どんなクラスが下がってしまうのではないかと思います。そういった問題は出てきていませんか？

T：特に今、韓国で問題になっているのは、ソウルと地方の間の学力格差が広がっていることです。例えば、(康先生は) 英語の授業ビデオを撮るために、3人の先生に依頼をしました。韓国には、ハンガンという川があります。河の南側にはお金持ち、北側には貧しい人たちが集まっています。先生が依頼した先生は南側に住んでいる先生でした。韓国では全国学力成就度評価があります。方法研にある報告書に、趙先生がそれについてまとめたものがのっています。その試験をもとに国が良い点数をとった学校に対して支援を行います。例えば、実験を行うとき、パソコンを個人

全員に配ったりするといったメリットが前面に出されます。その反面、あまり成績が良くないところにはそういった支援をしないということを国が政策として示しているのです、国全体があつくなっているのです。

また、日本では理解しにくいかもしれませんが、韓国では貧しい家であってもお父さんお母さんが子どもにはすごくお金を使います。例えばお父さんの収入が足りない場合には、お母さんが何をしてでも子どもを塾に通わせる環境を作ります。家族というより子ども中心の社会になっているため、韓国で問題になっているのは地方とソウルの差です。

S：塾にみんな通っているというお話でした。日本の場合、塾では知識をどれだけ覚えているかが重視され、それがテストされるという印象です。韓国では、塾でも遂行評価を意識して行われているのですか？

T：韓国ではもちろん遂行評価を行うことによって、今まで 100 点万点の点数で評価していたのが、論述式で評価する傾向がでてきました。

趙先生：実は韓国の塾は教育課程に合わせて教えるので、教育課程が変わると観点が変わります。丸暗記の知識も教えますが、例えば遂行評価を行うことになると、塾でも遂行評価形式で行うのです。塾の先生は学校の先生よりすごく給料がよいのです。それくらい有名な先生方を招いて塾を運営しているため、塾も遂行評価に合わせた授業をおこなっているのです。

T：塾のなかにも色々な塾があり、例えば英才教育の塾などがあります。キムヨナやゴルフのパク・セリなどは英才教育を受けたのだらうと思います。しかし、韓国でいわれる英才教育にはそういったものだけではなく、学校で学ぶ学習に対して事前に塾で学んで学校に行くといった英才もみられます。しかし、この状況はあまりにも教育熱が高く、問題であると思っています。教育というのは人間を作ることだと思っているので、韓国の教育では、本当の人間を作っているのか、ということに疑問を感じています。

T：韓国では遂行教育が大切にされてはいますが、教育哲学を持っている保護者の中には、こういった韓国の教育が問題だと思い、1995 年以降あらわれている大安学校に子どもを通わせる人がいます。そこでは国の教育課程に準じて教えられることはありません。自然とともに活動を中心に、実際生活の中で学ぶ学校です。ただ、そこに行っている学生の何が問題かという、小学校の時に大安学校に行ってしまうと、法律的に普通の中学校に行くことができないのです。それで小中高、大安学校に行きます。そうすると、今度は大学入試を受けることができないのです。人間は何なのか、人間社会で大切なのは何なのか、教育の価値は何なのかが問われています。彼らは、結局また国が認定する試験を受けなくてはならないのです。彼らは小・中・高の卒業試験を受けてから、大学受験を受ける必要があります。（康先生は）大安学校はいい学校であると思っていますが、国の政策としてはまだ色々な問題点を抱えているという状況です。

T：（康先生は）今日と明日しか時間がないため、大安学校や英才学校についてはあまり扱うことはできません。しかし、また機会があればぜひ扱いたいと思っています。なお、英才学校に興味がある

ある方はSさんが博士論文で分かりやすくまとめています。

みなさんにお会いできて心から嬉しく思っています。韓国の学生はあまり書かず聞いているだけなのですが、みなさんは大変メモを行い鋭い質問をします。みなさんと一緒に授業をできて心があたたかくなり、嬉しく思っています。本当にありがとうございました。

(奥村好美)

第二日目 午前の部「遂行評価 (performance assessment)」

通訳：趙 卿我 (教育実践コラボレーションセンター助教)

記録：山本 はるか (教育学研究科修士課程1年)

T: おはようございます。昨日は、長い時間、講義を聞いてくださってありがとうございます。みなさん熱心にメモを取ってくださって、感激していました。残り1日ですが、今日もがんばっていきましょう。今日は、昨日お話しした遂行評価のつづきをお話します。

■ 遂行評価の方法

スライド 10

T: 遂行評価は、約10種類の方法に整理することができます。これらの方法は新しいものではなく、すべて従来から行われてきたものです。またそれぞれ独立しているものではなく、相互に補完しあっています。教授・学習の改善のために、また学生の学業支援のために行われる評価は、すべて遂行評価であると言えます。それでは、ひとつずつくわしく見ていきましょう。

スライド 11

T: 1つめは、叙述型及び論述型の評価です。叙述型の評価は、選択式の設問ではなく、問いに対して学生自らが答えを書くというものです。その答えは、ある程度教師が想定しています。また叙述型の評価は、問題解決の過程を把握するための評価方法です。従来の叙述型の評価は、断片的な知識を問うものでしたが、現在では、総合性や問題解決能力、高次の思考能力を問う問題に変わってきました。また、従来はひとつのトピックに関して叙述することを求めていましたが、現在ではトピックに関する情報を整理した上で、それに対して批判的な立場からの叙述を求めたり、情報を分析した上で、自分の意見を述べることを求めたりするような評価に変わってきました。

一方、論述型の評価では、教師は学生の書く答えを想定してはいません。叙述型も論述型も、創造的に、また論理的に書くという点は変わりませんが、論述型の評価では、自分の文章をどのように組織し、構成し、批判し、分析したりするのかという点を評価します。延世大学においても、論述型の評価が行われており、学生1人の解答を、3人の教師が評価しています。評価の際には、ある程度の方向性を定めていますが、もし学生の解答が異なる方向性を持つものであったとしても、文章の構成力がある場合や、創造力がある場合、問題解決能力がある場合、情報を的確に収集し分析する能力がある場合には、良い評価を得ることができます。

2つめは、口頭試験です。これは、紙と鉛筆が開発される以前から行われてきた評価です。あるテーマについて自分の意見や考えを発表させ、学生の準備度、理解力、表現力、判断力、コミュニケーション能力を直接評価します。

3つめは、討論です。これは教授・学習活動と評価活動を統合する代表的な評価方法です。あるテーマについて学生同士で討論する場面を直接評価するものです。

スライド 12

T：4つめは、実技試験です。実技試験はこれまでも行われてきました。従来の実技試験は、コントロールされた状況で行われていました。一方、現在の実技試験は、「真正の状況」で複数回観察し、遂行する能力を評価しています。例えば体育のバスケットボールの実技試験では、従来はシュートの入る回数を評価していましたが、現在では実際に試合をさせ、その試合の中でどのような動きをするのか、ということの評価するようになりました。また従来は練習と評価が区別されていましたが、現在は両者を区別せず、教授・学習活動と評価活動が統合して行われています。

5つめは、実験・実習です。これは自然科学分野で頻繁に行われています。教師は、あるトピックを学生に与え、学生が実験・実習にどのように関わっているのか、その過程を直接観察し、提出された報告書と共に評価します。実験・実習は、個人で行うこともあれば、グループで協力しあいながら行うこともあります。実験・実習で使用する道具の扱い方や、トピックに関する問題解決の方法を包括的に評価することもできます。

6つめは、面接です。面接とは、教師と学生が直接対話をするを通じた、お互いが必要な情報を収集するものです。直接顔を合わせることができるので、紙と鉛筆を用いる書類上の評価とは異なる評価を行うことができます。韓国の大学入試で取り入れられている大学入試査定官制度の中でも、面接は非常に重視されています。面接は、遂行評価の持つ教育哲学と深い関わりをもつものです。面接を行うことのメリットは、学生が予期しない情報や資料についても柔軟に対応できるかどうかを評価できるという点にあります。またひとつのトピックに関して深く質問することもできます。

スライド 13

T：7つめは、観察です。観察は、遂行評価の中でも特に頻繁に行われる評価です。教師は、日常生活のなかで子どもが一人で、もしくは集団で、どのように活動しているのかを観察することができます。このような観察は人為的に作られた状況ではなく、自然の状況における子どもたちの行動を評価することができます。観察を通じて評価を行うためには、日常の記録やチェックリスト、ビデオを用いることになります。

8つめは、自己評価及び相互評価です。自己評価は、学生が自ら、学習の過程や結果を評価するというものです。また同じクラスで勉強している友人について評価する、相互評価も行われます。最近では、学習日記という自己評価の方法がよく用いられています。

9つめは、研究報告書です。学生の興味、関心に合わせて研究テーマを選択し、資料を収集、分析、総合して研究報告書を作成し、提出します。もちろん研究報告書も、個人で行う場合やグ

ループで行う場合もあります。

スライド 14

T: そして最後に、ポートフォリオ評価があります。これは、学生の研究作品を継続的、体系的に集めた個人の作品集です。教師は、学生個人の変化や発達過程を総合的に、また全体的に評価することができます。これには、先生とのやりとりの記録や、自分で撮ったビデオなども含まれます。

以上、遂行評価の方法を見てきました。何か質問はありますか？

S: 口頭試験と面接の違いは何ですか？

T: 口頭試験は、一問一答式で行われますが、面接の場合は、評価者が得ようとする情報をくわしく質問することができます。また、口頭試験は、知識や思考能力などを学生が発表するものですが、面接は、学生同士や学生と評価者の間で行われる、議論のやり方やグループでの討論の過程を評価することができます。

■遂行評価の設計

スライド 16

T: ではつづいて、遂行評価の設計について見ていきましょう。遂行評価は4段階で設計されます。この4段階は遂行評価だけでなく、すべての評価を設計する際にも行われます。

第1段階は、評価目的の確認を行う段階です。ここではまず、評価結果をどのような目的で使用するのかを決めます。例えば、その子どもがどのような能力を持っているのか、予習ができているのかなどを見取することを目的とする場合や、授業改善や教師の目標を達成できているかを確認することを目的とする場合などがあります。次に、誰が評価結果を使うのかを明らかにします。教師や学生、保護者、教育長などの場合が考えられます。そして最後に、評価する対象が誰なのかを確認します。評価する学生の人数や、どの学年の学生を評価するのかなど、評価対象の特徴を確認します。

第2段階では、評価内容を決定します。まず評価の内容と機能を明らかにします。内容は、教科や単元などで決めることができます。ブルームの言うように、知識の段階なのか、理解の段階なのか、適用の段階なのかを明らかにします。次に遂行課題を選別します。なぜ遂行評価を行うのか、その目的が明確に表れるようにしなければなりません。最後に、遂行準拠を示します。これは遂行評価を行う上で、最も核心的な部分と言えます。韓国では上・中・下の3段階で遂行準拠を示すことが多いですが、「上」というのはどのような段階なのか、「中」とはどのような状態を示すのかなど、その段階を示す根拠を明らかにしなければなりません。

第3段階では、評価方法を設計します。ここでは、遂行を果たすことができる最も適切な評価方法を決定します。学生が自分の能力を発揮できる課題となっているのかを確認します。そして教師が評価する対象や、評価を行う日程を全体に公表するのかどうかを決定します。もし大学で日程を公表せずに遂行評価を行うことがあれば、学生からの不満は高まりますが、例えば情意的な領域、意欲や動機などを遂行評価で評価したい場合には、日程を公表しない場合もあります。最後に収集する評価資料の量を調節します。1回で行うのか、複数回行うのかを決定します。

第4段階では、採点計画を作成します。採点記録方法はどのようなのか、採点者は誰なのか、採点結果の記録をどのように行うのかを確認します。採点記録方法としては、総括的な評価と、分析的な評価があります。総括的な評価は、選抜や順位をつける際に用いられますし、分析的な評価は個人の熟練度を評価する際に使われます。採点は、学校現場ではほとんど教師が行いますが、資格を持っている専門家や、学生が行うこともあります。特に大学入試などは専門的に学習した者がよいと考えられます。採点結果の記録方法としては、論述の場合や点数化する場合があります。遂行評価は質的な評価なので、ルーブリックを用いて評価する場合がありますが、現場に応じて3段階の評価や10段階の評価を行うことが可能です。

■遂行評価の課題

スライド 22

T：つづいて、遂行評価の課題を見ていきましょう。遂行評価の課題は、4つ挙げられます。

スライド 23

T：1つめは、費用と時間です。従来は多肢選択式の評価であったため、評価をパソコンで行うことができました。しかしながら、遂行評価は質的な評価のため、複数の教師が関わる必要があり、従来の評価よりも多くの費用と時間が必要になります。従来の評価と遂行評価を比較してみると、費用と時間が20倍以上必要になるとの結論を出した論文もあります。

2つめは、採点規準です。遂行評価は、先ほども確認したように、多様な評価方法を用います。また遂行のプロセスを評価することもできます。評価者によって、採点結果が異なる場合が出てこないよう、採点規準を明確に示しておく必要があります。だからこそ、体系的で明確に定められたルーブリックが必要なのです。ルーブリックは、学生が目指すべき目標と水準を示されなければなりません。

スライド 24

T：3つめは、妥当性です。遂行評価は教師の専門性に基づいて行われるため、評価者の妥当性を確保することが非常に困難です。また遂行評価は、教師が直接行う評価であるため、教師の主観性が含まれる可能性があります。そのため、採点規準が明確に定められたルーブリックが必要となるのです。教師が目標として定めた内容を、学生が獲得しているのかどうかを評価できる場合、その遂行評価は妥当性が高いと言えます。また、ひとつの問題が解けるかどうかということが、別の問題を解けるかどうかを推定できる問題である場合、妥当性が高いと言えます。多肢選択式の場合、問題数を多数用意できていたため妥当性を高めることが容易でしたが、遂行評価の場合は、問題数が少ないため、妥当性を高めることが非常に重要となります。

スライド 25

T：4つめは、信頼度です。妥当性があったとしても、信頼度がない場合、遂行評価の価値が低くなってしまいます。誰が採点を行っても、同じ結果が得られる場合、信頼度が高いと言えます。遂行評価は、学生の作品に対して、複数の評価者が採点することになりますが、評価者間で同じ採点を確保するために、規準の明確に定まったルーブリックを作成することと、評価者の

専門性を高める訓練を行うことが重要です。以上で遂行評価の課題の説明を終わります。何か質問はありますか？

S：韓国では塾が盛んだと聞きました。もし塾で遂行評価の練習を行うと、本当の子どもたちの力を見取ることができないのではないかと思います。どうでしょうか？

T：韓国では1997年度から遂行評価が導入されました。小学校では、单元ごとに毎日毎時間遂行評価が行われています。小学校の場合は大学入試と距離があるため、点数を明らかにすることよりも、子どもたちの発達の記録を残すことが重視されています。しかしながら、中学校や高等学校の場合は、大学入試を身近に控えているため、やはり知識を重視した授業となる場合が多くなってきます。その場合、塾に通っている学生の方が、成績がよくなります。ただし韓国では、1クラスに30人いる場合、塾に通わない学生は1～2人ほどです。ほとんどの学生が塾に通っています。

S：韓国では放課後にクラブ活動は行われていますか？

T：韓国では、スポーツや芸能に興味関心のある学生は、それに特化した塾に通っています。また学期初めにはアンケートをとって学生の家計状況を把握し、もし支援が必要な場合には適切な支援が行われます。

■遂行評価の事例

スライド 26

T：では、実際に遂行評価が行われている授業を観てみましょう。昨日は英語の授業を見ましたね。今日は、算数の授業風景を見てみましょう。

この授業では、直方体の展開図を作ることが目指されています。2つの展開図を描き、1つは実際に直方体を作成してみます。実際に直方体を作成することで、その展開図が正しいものなのかどうかを確かめることができます。もし直方体を作成できなかった場合は、展開図を描き直し、再び直方体を作成するよう助言します。教師は直方体を提出することができたか否かのみをチェックリストに記入します。子どもたちの作品は一人ひとり異なるので、授業の最後に全体で、どのような作品があるのかを確認します。

（ビデオ観賞）

今日観たビデオは1時間の授業であったため、日本の授業と異なる点を見つけることは難しかったかもしれません。ひとつの单元など、長期的に授業を見ると、また違ったものが見えてくるかもしれませんね。それでは午前の授業はこれで終わります。午後は、大学入試査定官制度について見てみましょう。

第二日目 午後の部「入学査定官制度」

通訳：趙 卿我（教育実践コラボレーションセンター助教）

記録：山本 はるか（教育学研究科修士課程 1 年）

■入学査定官制度の現状

スライド 3

T：午後は、韓国における入学査定官制度についてお話しします。

入学査定官制度は、多様な選考や学生の潜在的な能力及び素質などを評価し、選抜する評価制度です。入学査定官は、独立した行政組織であり、年間を通じて大学入試関連業務を遂行する専門職です。入学査定官は、年間を通じて、高校や大学の教育課程を分析し、情報の蓄積及び管理を行い、効果的な選考方法の研究開発を行っています。また選考期間中は、多様な試験資料を審査し、学生の潜在力及び素質を評価し、入学可否を決定します。そして学生が入学した後は、学生の学業や、学校生活を支援する仕事もしています。アメリカでも査定官制度は導入されています。アメリカの4年制大学では全体の14%で行われています。私が以前勤務していたカルフォルニア大学においても、23%の学生が査定官制度を利用して入学しています。1人の査定官が、400人の学生を査定します。その際、教科外の評価、高校の成績や自己紹介書を査定します。2人の査定官が査定を行い、クロス評価を行います。一方ハーバード大学の場合、全体の7.7%が査定官制度を利用して入学しました。1人の査定官が770人の学生を査定しました。また入学査定官を統括する、査定官運営委員会も存在します。日本においても慶応大学をはじめ、76校がAO入試を行っています。韓国では2009年度に査定官制度を導入し、2012年度にはすべての大学で査定官制度が行われることを目指しています。

■入学査定官制度導入の背景

スライド 4

T：このような入学査定官制度が導入された背景には、従来の大学入試制度の不備が指摘されたという歴史がありました。従来は、成績の点数化や単純合算などによる選抜方法が行われていました。また大学入試を受ける機会が年に1回しか存在しないことが問題視されていました。特に問題視されていたのは、大学が選抜の際に求める能力と、小中高等学校が育もうとしている能力との間に大きな違いが存在していることでした。

このような状況を反省し、現在韓国では査定官制度を導入することで、入試選考の先進化を目指しています。入学査定官制度の特徴は、学業及び学校生活をモニタリングしたり、支援したりすることができるということです。1980年まで、韓国では各大学が独自の入学試験を実施していました。どの大学も、入学試験を突破すれば入学が許可されており、中学校や高校での成績は大学入試には影響を与えていませんでした。その後、学生生活記録簿と各大学の入学試験の結果との合算により、大学入学が決定されるようになりました。さらに査定官制度では、学生生活記

録簿だけではなく多様な選考要素を深層分析し、それを入学試験に反映することができるようになりました。査定官制度を導入することにより年に複数回受験する機会が設けられ、また筆記試験だけでなく、学生の多様な能力を試験の対象とすることができるようになりました。さらに大学の特性に合わせて潜在力がある学生を選抜することができるようになりました。

■査定官制度の推進実績

スライド 5

T：2004年10月、2008年度以降に入学査定官制度を導入することが予告されました。そして2006年8月には、2008年度以降の大学選考基本計画において、入学査定官制度の運営を行うことが勧奨されました。入学査定官制度の定着を図るため、さまざまな研究が行われました。入学査定官を定着するための選考方法や、査定官が専門性を持つための訓練や管理に関する研究です。

スライド 6

T：入学査定官を定着させるために、財政支援も行われました。2007年度には20億ウォンを10大学に、2008年度には157億ウォンを40大学に支援しました。各大学が査定官制度を導入するために必要な費用すべてではありませんが、必要な費用の85%を国が支援しています。2009年度以降も査定官制度を維持する大学には70%を支援しています。そのような状況を毎年質的に評価しています。査定官が専門性を発揮しているかどうか、専門性を持つために十分な教育が行われているかどうか、正規で雇用されているかどうかなどを評価しています。入学査定官の人数は、2007年度は40名でしたが、2008年度には218名に増えました。しかしながら、そのうち正規で雇用されているものは、2007年度は3名、2008年度は17名しかいません。学生選抜過程の書類審査だけに参加する非正規の査定官として雇用している大学もあり、身分の不安定さが問題として浮上しています。

スライド 7～10

T：現在、査定官制度を導入している大学は、韓国大学教育協議会が運営している、査定官制度のホームページで確認することができます。この協議会は、定着と運営を図るために活動しています。

■査定官制度導入の共通手続き及び基準

スライド 11

T：入学査定官制度は、各大学により異なる部分もありますが、国としては一定の手続きを踏み、基準を満たす必要があるとの見解を示しています。以下がその手続きです。

まず事前に、試験の趣旨、資格、選抜基準、選抜方法、提出資料を告知する必要があります。書類審査では、資格審査を行い、学生生活記録簿や自己紹介書、推薦書、大学修学能力の成績などを審査します。深層面接・討論では、潜在能力、創意性、素質、思考力、人間性、適性、教育環境を把握します。そして最後に、合格者を決定します。決定する際、最終選抜委員会が二次審査を行う場合もあります。これらの手続きを行うことが、入学査定官制度を実施する際に必要となります。

■ 共通選考要素

スライド 12

T：では、査定官はどのようなことを見ているのでしょうか。

まず学生の特性として、認知的特性と情意的特性を選考の対象とします。認知的特性とは、思考力・理解力・分析力・論理的思考力・創意力・問題解決力や、関連分野における素質・学業適性、そしてコミュニケーション力などです。一方、情意的特性とは、自信感、積極性、リーダーシップ、責任感、目標志向性、自己管理能力、道徳性、社会性や、知的好奇心、熱意、学習動機、価値観、学習態度などです。これらは紙と鉛筆では判断することのできない能力です。査定官制度を導入することで、学生の高次の能力を評価することができるようになったということが、ここからもわかるでしょう。

また、大学の建学理念や学科の特性に適合しているか、リーダーシップがあるかどうか、募集要綱に適しているかどうかなど、大学自体への適合性を選考の対象とすることもできます。例えば延世大学は、カトリック精神を貫く大学ですので、相手への配慮ができているかどうかも選考の対象となります。

他にも学生の教育環境を調査します。大学に通う家庭環境があるのかどうか、高校の教育課程はどのようなものであったか、なども選考の対象となります。

■ 入学査定官制の支援政策

スライド 13

T：それでは次に、入学査定官を定着させるために行われてきた支援政策を見ていきましょう。これまで3段階の支援政策が行われてきました。

第1段階は、入学査定官の内実化の段階です。すべての大学に支援を行うことは予算上限界がありますので、まずは推進校に集中的に投資し、内実化を図っています。推進大学として47校が選抜され、そのうち15校は先進校、23校は継続校、9校は新規校として支援が行われました。入学査定官の役割は、書類審査や面接審査などです。以前は、査定官が書類審査を行い、大学教授が面接審査を行う大学もありましたが、現在ではどちらの審査も専門性を持った査定官が行うことが推進されています。入学査定官の専門性を高めるために、また専門性を持つ査定官を安定的に確保するために、訓練プログラムも運営されています。

スライド 14

T：第2段階は、入学査定官の拡大を目指す段階です。推進大学と査定官の数をそれぞれ拡大させることを目指しています。査定官の役割は、学生生活記録簿の内実化を図ること、学校情報を公示すること、進学担当教師の専門性を強化することにより、私教育に依存せず、大学入試の準備を行うことです。入学査定官を活用した選抜学生の数と、入学査定官採用のための予算支援を拡大します。

スライド 15

T：第3段階は、入学査定官を定着させる段階です。第1・2段階で選抜された推進大学以外の大学

にも、制度を拡大します。推進大学がモデルケースとなるように、推進大学に対しても継続的に支援を行います。各大学の特性に応じながらも、「韓国型」の査定官制度を定着させることを目指しています。2012年度以降も継続的に予算支援を行います。

■入学査定官制の事例①：延世大学

スライド 16・17

T：では査定官制度の具体的な事例を見てみましょう。韓国では査定官制度が導入される以前は、修学能力試験の結果を用いて選抜が行われていました。修学能力試験の結果は、行きたい大学1校にのみ提出することができました。もし提出した大学に入学が認められなかった場合、他の大学に志願することはできませんでした。

延世大学は、査定官制度を導入する際、入試の機会を複数回設けることに決めました。また入試の機会を増やすだけでなく、多様な方法で学生を選抜することができるように、さまざまな選考内容を設けました。例えば「農漁村学生特別選考」とは、農漁村出身者に限定した選考です。これまで農漁村出身者が大学に通うことは、非常に難しいものでした。しかしこの選考を設けることにより、さまざまな学生に対して大学へ入学する道を広げたのです。また「在外国民選考」とは、大学に入学する以前に海外で教育課程を履修した者を対象に行われるものです。すべて書類審査で選抜を行う選考や、筆記試験と書類審査の結果を合わせて選抜を行うものもあります。選抜の際には、筆記試験と書類審査以外にも、論述試験や、高校までの学生生活記録簿などが用いられる場合もあります。

■入学査定官制の事例②：ソウル大学

スライド 18

T：それでは次にソウル大学の事例も見てみましょう。ソウル大学では、準備段階と最終段階を含めて、全部で5段階の評価過程を行います。

スライド 19

T：準備段階では、情報の収集と事前教育を行います。ここでは、入学選考委員や専門員、そして研究員に対する事前教育を行います。評価を行う前に、評価に関する情報を収集したり、評価規準を設定したり、情報収集のため、志願者に追加書類を要求したりします。また推薦書、自己評価書など実際に確認する対象を決定します。教育現場チームは、推薦書を書いた高校の担任と面談したり、志願者の家庭を訪問したり、市県事務所を訪問し、学生の提出した書類内容を確認します。

スライド 20

T：第1段階では、個別評価資料を作成します。学業能力や非教科の活動、教育環境、募集関連の適性など、評価項目に従って志願者の書類を項目別に整理し、その規準を用いて予備評価を行います。また予備評価の過程で確認が必要な事項を記録したり、予備評価者の意見を記録した予備評価書を作成したりします。予備評価では、クロス評価を行います。予備評価の結果について「入

学選考室」の中にある小委員会で最終的に修正、補完、確認を通して1段階の評価を整理します。

スライド 21

T：第2段階は、書類評価と面接評価に分けられます。選考委員会は予備評価の結果を参考にして、志願者の書類を総合的に評価します。志願者の書類を綿密に検討して学業能力、潜在力などを評価します。また、面接で確認する項目についての意見交換を行います。面接では志願者の書類審査をもとに、入学後の専攻に対する適性及び学業遂行能力などを確認します。

スライド 22

T：第3段階では、会議結果に対する2次評価及び検証を行います。志願者の以前の段階の評価を総合して選定します。学業能力、非教科活動、教育環境、面接および口頭試験の結果、募集の特性および全体選考委員の合意にもとづいて合格者を選定します。ここでは、全体の評価過程を再確認します。

最終段階では、入学査定委員会で評価結果を確認します。このようにソウル大学では、入学査定官制度が実施されています。

■入学査定官制の事例③：KAIST 大学

T：それでは次に KAIST 大学の事例を見てみましょう。KAIST 大学は、科学の英才学校で、査定官制度を積極的に導入している大学です。実は韓国内で、ソウル大学よりもよい評価を得ており、世界でトップの大学を目指しています。

KAIST 大学はグローバルリーダーを育成することを目指しており、その意味でも査定官制度を積極的に導入しています。従来の紙と鉛筆で行う評価では、グローバルリーダーを育成することはできないと考えているからです。新しいアイデアや概念を生み出す、創造的な学生を育成することを目指しています。

KAIST 大学では、以前成績を中心に選抜を行っていました。しかしながら、紙と鉛筆を用いて行う入学試験において高い成績を示した学生が、必ずしも入学後に高い成績を示すとは限らないという結果が確認され、紙と鉛筆を用いる評価が、彼らの潜在能力を示さないことが明らかにされました。さらに学生の多様性を尊重することの必要性も指摘されはじめました。

そこで面接審査を導入しました。KAIST 大学が面接審査で最も重視したのは、学生がどのような可能性を秘めているのかを評価することです。そしてその可能性を、大学が育成することが目指されています。KAIST 大学が最も重視している学生の能力は、探究能力とコミュニケーション能力です。さらに、卒業後に自分の進路を開拓することができるのか、特別な分野において個性を発揮することができるのか、という点も評価項目に挙げられました。

面接審査は、グループ討議を行わせたり、個人で問題解決を行わせそれを発表させたりします。グループ討議は 50 分間行われます。まず 5 分でテーマを決め、40 分間討議を行い、残り 5 分で質疑応答を行います。KAIST 大学の授業はすべて英語で行われるため、個人面接もすべて英語で行われます。個人面接は 20 分ほど行われます。まず 3 分間発表をさせ、残り 17 分はインタビューを行います。以上、KAIST 大学では、高校時代の成績、探究能力・コミュニケーション

ン能力・進路開拓能力・特別な分野における英才能力が評価されます。

このような評価に対して、評価を行う面接委員や学生自身にアンケートを行いました。面接委員は、学生の多様性を評価できるようになったと答えました。学生たちも、妥当性と信頼性のある評価であると答え、肯定的な反応を示しました。さらにグローバルリーダーは、自分の専門分野だけでなく、様々な分野の人たちとコミュニケーションをとる必要があるため、そのような能力を見取ることのできる制度であると評価しました。このような大学の変化により、高校現場も変化を遂げました。KAIST 大学は韓国内でも査定官制度の導入が成功した事例として知られていますので、みなさんに紹介しました。以上が KAIST 大学の事例です。何か質問はありますか？

S：カン先生が実際に授業をしていて、入学査定官制度を導入される以前と以後で、学生にどのような違いが見られますか？

T：実は今、大学院の学生だけを指導していますので、査定官制度を利用して合格した学生を指導していませんので、詳細は把握していません。ごめんなさい。

それではこれで講義を終わりたいと思います。2日間ありがとうございました。

(山本はるか)

2010年
京都大学大学院教育学研究科 集中講義 資料

● 国際教育研究フロンティア B

- 延世大学教育大学院
- 外国語としての韓国語教育科 准教授
- カン スンヘ(康 承恵)

韓国の教育課程の歴史

学習内容

1. 過去のエ育課程
2. 現在の教育課程(1997～)



過去の教育課程

1. 過去の教育課程

1) 教育に関する緊急措置期

1945～1946

- ・韓国語の授業が開始される。修身科を廃止し、新たに民主的な市民を養成するための公民科を採用する
- ・歴史を教科に含める
- ・国語、数学、英語教科に重点的に時間を配当する

1. 過去の教育課程

2) 指導要綱期

1946～1954

- ・教科の指導内容を詳細に表示して、基礎能力の育成に力を注いだこと
- ・教科は分科主義を採択→体系的な指導と知育に重点を置いたこと
- ・愛国心と民族愛の教育を強調し、日本占領時代の残滓を早く除去すること

・資料 (p. 4)

1. 過去の教育課程

3) 第1次 教育課程期(1954～1963)

理念及び基本方針

- ・教育課程は、「各学校の教科目及びその他の活動から編成」される
- ・教育課程 → 「教科中心」、教科書 → 「生活中心」
- ・国家水準の教育課程は、必修教科(8教科)と選択教科(実業・家庭、外国語、その他の教科)から構成される 資料 (p. 5)
- ・反共・道德教育、実業教育を強調する
- ・特別活動の時間 → 全人教育

1. 過去のエ育課程

3) 第1次 教育課程期(1954～1963)

編成及び運営

初等学校	<ul style="list-style-type: none"> 教科活動と特別活動の2領域 8教科に増大 道徳科: 全教科及び学校全体として指導する。
中学校	<ul style="list-style-type: none"> 教科活動と特別活動の2領域 必修教科(8教科) + 選択教科(実業・家庭、外国語、その他の教科) 道徳科: 社会生活科で35時間確保
高等学校	<ul style="list-style-type: none"> 年間の授業時間を表記 → 地域社会の事情に合わせて運営 道徳科: 週1時間必修 教科活動 = 必修教科 + 選択教科(実業高校→専門教科含む)

1. 過去のエ育課程

4) 第2次 教育課程期(1963～1973)

理念及び基本方針

- 教育課程 — 「学校の指導下で生徒が得る経験の総体」
- 教育課程の内容 — 地域性、生産性、有効性を強調
- 教育課程の組織 - 小・中・高の連係 (articulation) と教科間の統合 (integration) を強調
- 教育課程の運営 - 地域性を強調

1. 過去のエ育課程

4) 第2次 教育課程期(1963～1973)

編成及び運営

初等学校	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程の編成 → 教科活動、特別活動、反共・道徳活動の3領域 教育課程の時間配分 → 教科は週ごとに履修時間を表記、特別活動は百分率で表記 社会生活科 → 社会科に改称
中学校	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程の編成 → 教科活動、特別活動、反共・道徳活動の3領域 選択教科を無くして共通必修教科を提示 教科: 1週間で1時間の縮小 特別活動: 各学年で8%以上確保 「ハンゲル教育」のため、漢字教育を廃止 → 1972年 文教部令で再開
高等学校	<ul style="list-style-type: none"> 共通科目 + 課程別選択課程(人文課程/理数課程/職業課程) 国家水準で教科別に単位を選定 → 各学校で教育課程を計画 部分改訂後、歴史教育の強調

1. 過去のエ育課程

5) 第3次 教育課程期(1973～1981)

理念及び基本方針

- 国民教育憲章(1968年) + アメリカの学問中心の教育課程に基づく
- 知識の構造を教え、学生自ら発見し、探究することを重視する
- 基本方針: 国民的資質の育成、人間教育強化、知識・技術の前進

1. 過去のエ育課程

5) 第3次 教育課程期(1973～1981)

編成及び運営

初等学校	<ul style="list-style-type: none"> 反共・道徳領域の廃止 → 道徳科の新設。反共については社会科の歴史で紹介 時間配分基準表: 学年別に年間の授業時間を表記 授業時間: 40分、45分
中学校	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程の編成: 教科活動 + 特別活動の2領域(道徳科を新設) 歴史を一つの教科として独立 「実業・家庭」のうち「女性技術」を「家庭科」に改称 必修教科(12) + 選択(実業・家庭)
高等学校	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程の編成: 教科活動(必修、必修選択、課程別選択) + 特別活動 時間配当においては、旧教育課程の教科を週単位で最小と最大の履修時間を表記し、履修に幅をもたせた。 総科目数 → 35(縮小)、特別活動 → 12単位 必修科目数 → I、課程別選択科目 → II

1. 過去のエ育課程

6) 第4次 教育課程期(1981～1987)

理念及び基本方針

- 目的: 期待される人間像(健康、能力、自主的、道徳的な人)
- 改訂の方針: ① 以前の教育課程の問題点を補完(学習内容の過多/学習しにくい教科内容/教科目優先の分科教育/基礎教育及び一般教育の不徹底/全人教育と人間教育の不備)、② 教育改革の措置に伴い教育方針の変更、③ 国民精神教育の強化。
- 特徴: 総合的(教科中心+経験中心+学問中心+人間中心)で社会的、学問的な適合性を等しく備えることを目的に構成された。

1. 過去の教育課程

6) 第4次 教育課程期(1981～1987)

編成及び運営

初等学校

・教育課程の編成：教科活動 + 特別活動の2領域
・第1、第2学年：教科の統合が始まる
・特別活動：第1、第2学年は、無配当。第4～6学年は、2時間以上に増加
・運営指針：計画、指導、評価、その他の4つで編成(評価指針)

中学校

・教育課程の編成：教科活動 + 特別活動の2領域
・教科：普遍化の傾向(第2、第3学年で 1科目縮小、自由選択科目の新設)
・特別活動：学級活動、クラブ活動(週1時間配当)、学校行事(別途時間を確保)

高等学校

・人文系、実業系、その他 高等学校の教育課程を統合
・教科活動：普通教科 + 専門教科
・教育内容の量を調節→ 全体履修単位縮小
・類似科目、関連教科統合
・特別活動：生徒護国団(学級活動+訓練)、クラブ活動、学校行事

1. 過去の教育課程

7) 第5次 教育課程期(1987～1992)

理念及び基本方針

・目的：健康、自主的、創造的、道徳的な人

・改訂方針：教育課程の適正化、内実化、地域化

・特徴

- 「地域化」を強調－教育課程の効率性を重視
- 基礎教育の強化
- 情報化社会に対応する教育の強化

1. 過去の教育課程

7) 第5次 教育課程期(1987～1992)

編成及び運営

初等学校

・第1、第2学年の統合教科の新設
・統合教科から国語、算数分離
・年間授業時数の増加
・週の授業時数
・特別活動運営の現実化

中学校

・科学教育の強化－ 数学と科学の授業時間の増加、男女の役割の再検討

高等学校

・科目別基準単位の提示 → 科目別基準単位に合わせた教科書

1. 過去の教育課程

8) 第6次 教育課程期(1992～1997)

理念及び基本方針

・目的：健康、自主的、創造的、道徳的な人

・改訂の中心

- ① 教育課程決定の分権化 ② 教育課程構造の多様化
- ③ 教育課程内容の適性化 ④ 教育課程運営の効率化

・特徴

- 編成・運営権を調整し、地方化時代にふさわしい分権化
- 国家レベルの教育課程：全国共通、一般的基準としての役割
- 地域レベルの教育課程：学校の教育課程編成・運営の支援
- 学校レベルの教育課程：各学校の事情に合わせて

1. 過去の教育課程

8) 第6次 教育課程期(1992～1997)

編成及び運営

初等学校

・教育課程の編成：教科、特別活動「学校裁量の時間」
・基本的な生活習慣と礼儀教育の強化
・低学年の統合教科を再考
・第3学年以上を対象に年間34時間の「学校裁量の時間」を新設

中学校

・週当たりの授業時数 → 34時間
・「実業・家庭」→ 「技術・産業」と「家庭」に改編し、男女共同の必修科目に指定
・「選択教科制」を導入

高等学校

・大学に進学するかどうかを考慮し、選択科目を履修することができるよう、レベル別・特性別に多様な科目を設定

2

現在の教育課程(1997～)

2. 現在の教育課程(1997～)

1) 理念及び基本方針

理念及び基本方針

- ・目的：国際化・情報化の時代を主導する自律的かつ創造的な韓国人の育成・追求する人
 - ① 個性を追求する人 ② 創造的な能力を発揮する人
 - ③ 進路を開拓する人 ④ 新しい価値を創造する人
 - ⑤ 共同体の発展のために貢献する人
- ・構成方針
 - ① 基礎的、基本的な学習能力を育成
 - ② 教科内容の量と水準の適切化→国民共通基本教育課程と選択中心教育課程の二元体制
 - ③ 地域教育庁と学校教育課程の編成・運営の自律性
 - ④ 定期的な教育課程の評価体制の構築

2. 現在の教育課程(1997～)

1) 理念及び基本方針

理念及び基本方針

- ・第7次教育課程の特徴の要約
 - ①国民共通基本教育課程を編成し、教育の共通性と普遍性の維持
 - ②学力水準別教育課程の導入
 - ③裁量活動の新設および拡大
 - ④質の管理に向けた教育評価体制の確立
 - ⑤教育課程の分権化（教育機関及び教育行政の役割分担）
 - ⑥教育課程運営の柔軟性の増大

2.現在の教育課程(1997～)

2)編成及び運営

編成及び運営

初等学校	中学校	高等学校
<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の編成：教科、裁量活動、特別活動編成 ・裁量活動の強化 ・学力水準別教育課程：数学→段階型、国語・社会・科学・初等英語→深化・補充型 ・「自然」と「英語」教科→「科学」と「外国語」に改称 ・教育課程の指針を通して「直接的な体験活動」を強調 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の編成：教科、裁量活動、特別活動編成 ・裁量活動の新設：教科裁量＋創造的裁量 ・学力水準別教育課程：数学→段階型、国語・社会・科学→深化・補充型 ・家庭技術・産業教科→「技術・家庭」に改編し、男女共同必修、第2外国語新設 	<ul style="list-style-type: none"> ・高等学校：第2・3学年は、選択中心の教育課程編成 ・裁量活動の新設 ・個々の学生に応じた教育課程運営 ・国民共通基本教育課程と選択中心教育課程の二元体制

2.現在の教育課程(1997～)

3) 重要特徴と要点

学力水準別教育課程

- ・学力水準別教育課程：学生の水準に合わせた教育処置を行う
- ・学力水準別教育課程：水準別教育を支援するための教育目標、内容、方法、評価
- ・学力水準別教育課程の編成・運営は、どのような教育的効果をもたらすのか？

選択中心教育課程

- ・第11、第12学年の学生の進路、適性、能力による選択中心教育課程
- ・高等教育における普通教育と専門教育をどう扱う？

2. 現在の教育課程(1997～)

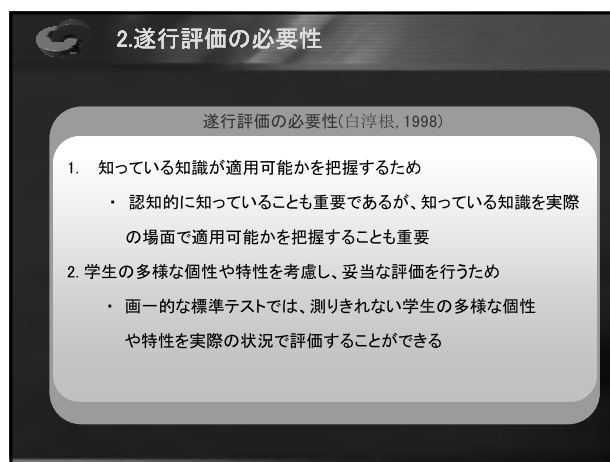
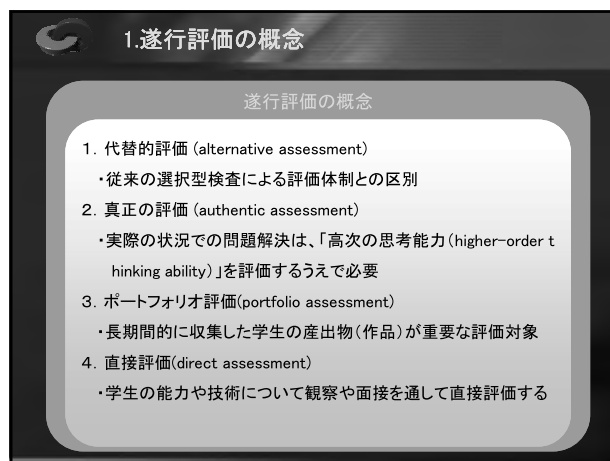
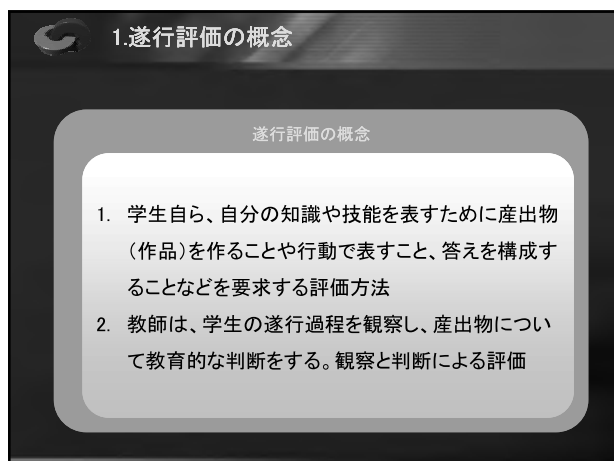
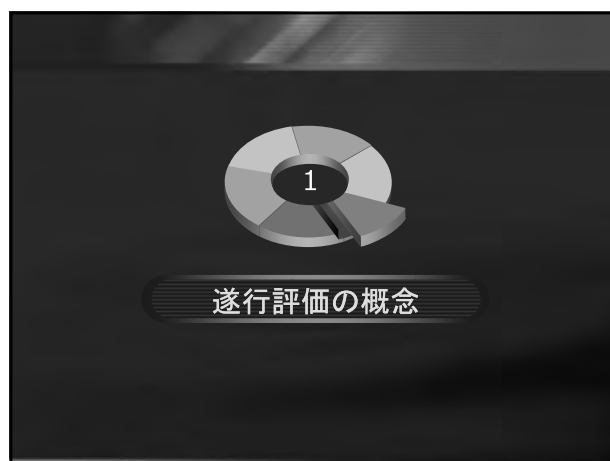
3)重要特徴と要点

裁量活動の教育課程

- ・裁量活動の教育課程運営の自律化を図る。
- ・1970年代の「自由学習の日」に基づいている。
- ・国家は、裁量活動の教育課程に関する権限を全面的に移譲し、地域、学校は実行可能な人的資源、予算、文化、組織を揃えるべき。

遂行評価

(performance assessment)



2. 遂行評価の必要性

3. 継続的で総合的な評価をするため

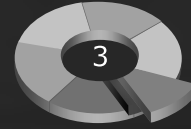
- 従来の評価では教授・学習は一、二度評価される程度。しかし、遂行評価では、それぞれの学生の個性、レベルに合わせて継続的、総合的に評価することができる

4. 学習者にとって有意義な活動にするため

- 暗記を主とする学習活動から学習者個人に有意義な学習活動を行うことができる

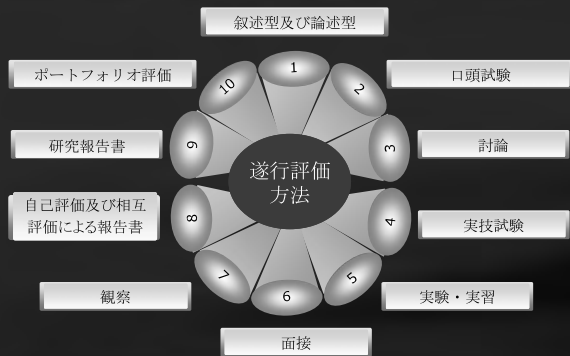
5. 教授・学習目標と評価内容を直接的に繋げるため

- 遂行評価を通して直接的に教授・学習の目標達成の可否を判断できる



遂行評価の方法

3. 遂行評価の方法



3. 遂行評価の方法

遂行評価の方法

1. 叙述型及び論述型

- 質問の形態は、創意、問題解決力などに繋がっている

2. 口頭試験

- あるテーマについて自分の意見や考えを発表させ、学生の準備度、理解力、表現力、判断力、コミュニケーション能力を評価する

3. 討論

- 教授・学習活動と評価活動を統合する代表的な評価方法。あるテーマについて学生同士が討論する場面を直接評価する

3. 遂行評価の方法

4. 実技試験

- 従来の評価 → 評価がコントロールや強要される状況
- 実技試験 → 遂行する能力を「真正の状況」で観察・評価

5. 実験・実習

- 教師は、実験・実習の過程を直接観察し、提出された報告書と共に評価する

6. 面接

- 予期しない情報や資料についても柔軟に遂行できるかどうかを評価する

3. 遂行評価の方法

7. 観察

- 教師は、日常生活のなかで子ども一人ひとりや集団について常に観察し、評価する

8. 自己評価及び相互評価

- 学生自らが学習の過程や結果について詳細な評価報告書を作成し、提出する

9. 研究報告書

- 個別の学生の興味・関心に合わせて研究テーマを選択し、資料を収集・分析・総合して研究報告書を作成し、提出する

3.遂行評価の方法

10. ポートフォリオ評価

- 学生の研究作品を継続的、体系的に集めた個人の作品集
- 教師は、学生個人の変化、発達過程を総合的に評価する
- 学生の役割や結果と過程の双方を重視する。「現在の状況より発展可能性が重視される」
- 図書リスト(学生が読んだ本、参照した本等)、報告書、課題に関連する記録、学習活動を記録したビデオ、録音等

4

遂行評価の設計

4.遂行評価の設計

評価目的の確認	<div><div>1. 評価目的の究明</div><div>2. 評価結果を活用する人の確認</div><div>3. 評価結果の活用</div><div>4. 評価対象の確認</div></div>
評価内容の決定	<div><div>1. 評価の内容及び機能の明確化</div><div>2. 遂行課題の選別</div><div>3. 遂行準拠を示す：ルーブリックの活用</div></div>
評価方法の設計	<div><div>1. 遂行を果たすことができる最も適切な評価方法を決定</div><div>2. 評価の全体像の公表を決定</div><div>3. 収集する評価資料の量を調節</div></div>
採点計画	<div><div>1. 採点方法</div><div>2. 採点者</div><div>3. 評価結果の記録方法</div></div>

4.遂行評価の設計

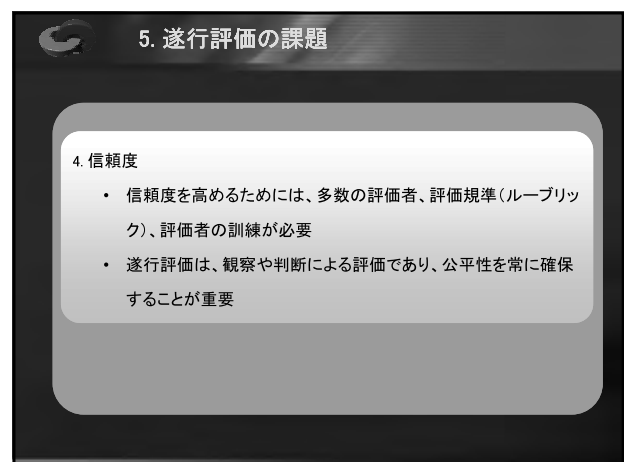
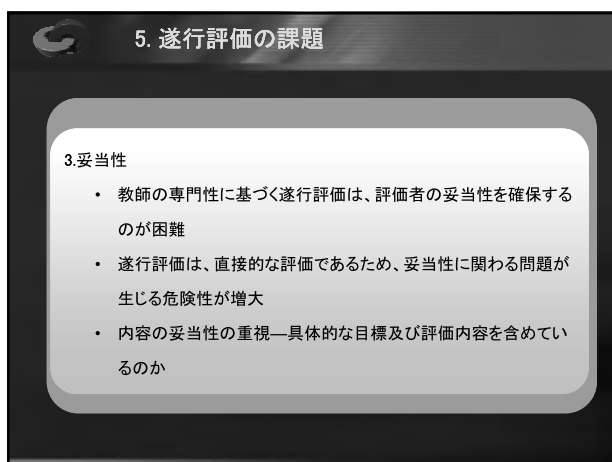
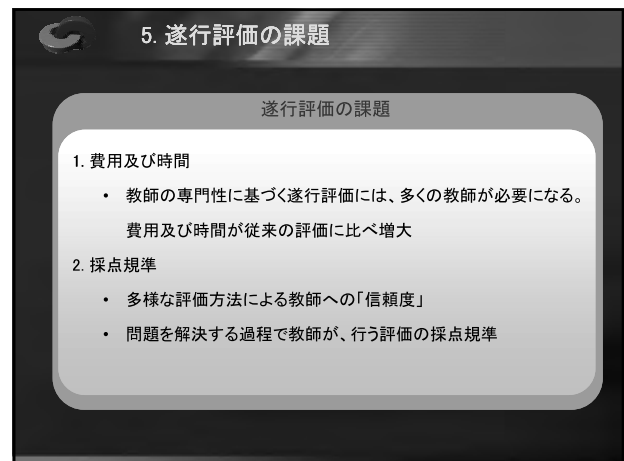
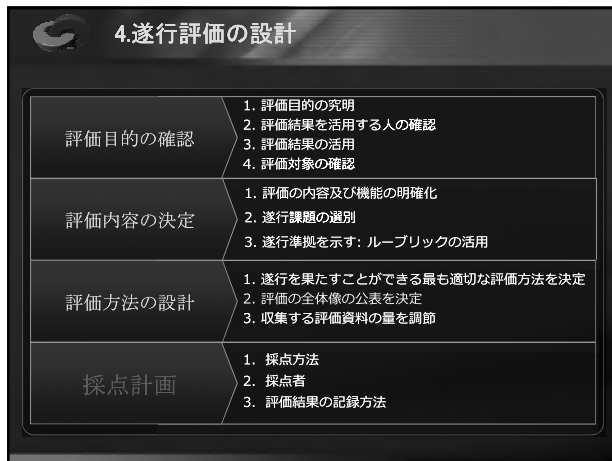
評価目的の確認	<div><div>1. 評価目的の究明</div><div>2. 評価結果を活用する人の確認</div><div>3. 評価結果の活用</div><div>4. 評価対象の確認</div></div>
評価内容の決定	<div><div>1. 評価の内容及び機能の明確化</div><div>2. 遂行課題の選別</div><div>3. 遂行準拠を示す：ルーブリックの活用</div></div>
評価方法の設計	<div><div>1. 遂行を果たすことができる最も適切な評価方法を決定</div><div>2. 評価の全体像の公表を決定</div><div>3. 収集する評価資料の量を調節</div></div>
採点計画	<div><div>1. 採点方法</div><div>2. 採点者</div><div>3. 評価結果の記録方法</div></div>

4.遂行評価の設計

評価目的の確認	<div><div>1. 評価目的の究明</div><div>2. 評価結果を活用する人の確認</div><div>3. 評価結果の活用</div><div>4. 評価対象の確認</div></div>
評価内容の決定	<div><div>1. 評価の内容及び機能の明確化</div><div>2. 遂行課題の選別</div><div>3. 遂行準拠を示す：ルーブリックの活用</div></div>
評価方法の設計	<div><div>1. 遂行を果たすことができる最も適切な評価方法を決定</div><div>2. 評価の全体像の公表を決定</div><div>3. 収集する評価資料の量を調節</div></div>
採点計画	<div><div>1. 採点方法</div><div>2. 採点者</div><div>3. 評価結果の記録方法</div></div>

4.遂行評価の設計

評価目的の確認	<div><div>1. 評価目的の究明</div><div>2. 評価結果を活用する人の確認</div><div>3. 評価結果の活用</div><div>4. 評価対象の確認</div></div>
評価内容の決定	<div><div>1. 評価の内容及び機能の明確化</div><div>2. 遂行課題の選別</div><div>3. 遂行準拠を示す：ルーブリックの活用</div></div>
評価方法の設計	<div><div>1. 遂行を果たすことができる最も適切な評価方法を決定</div><div>2. 評価の全体像の公表を決定</div><div>3. 収集する評価資料の量を調節</div></div>
採点計画	<div><div>1. 採点方法</div><div>2. 採点者</div><div>3. 評価結果の記録方法</div></div>



6. 遂行評価の事例: 初等学校

遂行評価の実例の例:

1) 初等学校 英語の授業の例:

- 文法: 'be going to' を使って未来の計画について話すことができる

- 課題: 夏休みの計画について話す

2) 初等学校 数学の例:

- 六面体(直六面体、正六面体) の表面積を計算する

- 六面体(直六面体、正六面体) の展開図を作る

入学査定官制
(Admissions Officer System)

49

目次

1

入学査定官制 の概要

2

入学査定官制の現状

3

入学査定官制 3段階の政策支援

4

入学査定官制の事例

50

1

入学査定官制の概要

入学査定官制の概念

・入学査定官制は、多様な選考によって学生の潜在能力及び素質などを評価し、選抜する評価制度

・入学査定官は、独立した行政補職であり、年間を通じて大学入試の関連業務を遂行する専門職

入学査定官の重要な役割

・年間: 高校及び大学の教育課程を分析し、情報の蓄積及び管理、効果的な選考方法の研究開発

・選考期間: 多様な試験資料を審査、学生の潜在能力及び素質を評価し、入学可否を決定

・入学後: 学生の学業、学校生活を支援

51

2

入学査定官制の現状

導入の背景

現在の大学入試制度

-従来の成績の点数化や単純合算などによる選抜方法

-大学の選抜と教育の連携不足

入試選考の先進化

-学業、学校生活をモニタリング及び支援

-学生生活記録簿だけではなく多様な選考要素を深層分析、反映

-大学の特性に合わせて潜在能力がある学生を選抜

-新入生の管理を通して選抜と教育の連携強化

入学査定官制

52

2

入学査定官制の現状

導入及び推進実績

> 2004年10月、2008年度以降「大学入学制度の改善案」に関する発表のなかで「入学査定官制」の導入を予告

> 2006年9月、2008年度以降の大学選考基本計画から基本計画による「入学査定官制」の運営を助奨

> 入学査定官制の導入のため、政策研究実行「2006年～」※ 2006年 1つ、2008年 3つ「入学査定官制の導入 方策、定着モデル開発、公平性確保の方策など」

53

118

入学査定官の現状

導入及び推進実績

＞入学査定官制に対する財政支援及び実績

年度	予算	支援大学	入学査定官 (正規/非正規)	選抜人数
2007年	20億ウォン	10校大学	40名 (3名/39名)	254名
2008年	157億ウォン	40校大学	218名 (17名/201名)	4,401名

＞入学査定官は、学生選抜過程の書類審査だけ参加する非正規が多いため身分が不安定

54

入学査定官制 Web

入学査定官制 HP



2

入学査定官制 Web



56

入学査定官制 Web



57

入学査定官制 Web



58

入学査定官制の現状

入学査定官制の共通手続き及び基準

事前告知	書類審査	深層面接・討論	最終選抜
<ul style="list-style-type: none"> 試験趣旨 資格 選抜基準 選抜方法 提出資料など 	<ul style="list-style-type: none"> 資格審査 学生生活記録簿(教科・非教科)、自己紹介書、推薦書、大学修学能力試験の成績 	<ul style="list-style-type: none"> 潜在能力、創造性、素質、思考力などの把握 人間性(人物)及び適性の把握 教育環境の調査 	<ul style="list-style-type: none"> 合格者の決定

超 韓我「韓国における「入学査定官制(Admissions Officer System)」の実態と課題」教育方法の比較(京都市立大学教育生研資料・教育方法学講座、2008年度、p.20から抜粋)

59

2

入学査定官制の現状

共通選考要素

要素	主要内容
学生的特性	認知的特性 ・ 思考力：理解力、分析力、論理的思考力、創意力、問題解決能力など ・ 適性（大学進学適性）：関連分野における素質、学業適性、大学及び学科教学能力など ・ 表現力：コミュニケーション能力（討論・説得力）など 情意的特性 ・ 人間性：自信、積極性、リーダーシップ、責任感、目標志向性、自己管理能力、道徳性、社会性など ・ 興味：知的好奇心、熱意、学習動機など ・ 態度：価値観、学習態度など ・ 潜在力、未来における成長可能性、学科に対する適応可能性など
大学及び募集要綱への適合性	建学理念及び学科特性に合っているか、リーダーシップの有無、社会的配慮、募集要綱への適合性など
教育環境	家庭環境、教育与件、高校の教育課程及び特性など

（趙 卿我「韓国における『入学査定官制(Admissions Officer System)』の実態と課題」『教育方法の探究』京都大学大学院教育学研究科・教育方法学講座、2009年度、p.20から抜粋）

60

3

入学査定官制 3段階の政策支援

入学査定官制の支援政策

第1段階: 入学査定官制の内実化(2009年度)

➢ 選択と集中の原則による推進大学の育成
- 推進大学に集中投資し、内実化を求める
- 入学査定官の役割: 入学査定官の書類・面接審査など参与の拡大
- 入学査定官制の支援事業: 47校を選別（先進15、継続23、新規9）

➢ 入学査定官の専門性の養成・訓練プログラムの解説・運営
- 専門性を持つ入学査定官の安定的な確保
- 専門能力の養成・訓練プログラムの運営機関5校を選別

61

3

入学査定官制 3段階の政策支援

入学査定官制の支援政策

第2段階: 入学査定官制の拡大(2010-2011年)

- 推進大学の拡大
- 入学査定官の役割の拡大、主導的参与
- 学生生活記録簿の内実化、学校情報の公示、進学担当教師の専門性の強化により私教育(学習塾)に依存せず、大学入試を準備
- 入学査定官制を活用した選抜学生数及び、入学査定官採用のための予算支援の拡大

62

3

入学査定官制 3段階の政策支援

入学査定官制の支援政策

第3段階: 入学査定官制の定着(2012年)

- 推進大学以外の大学まで拡大
- 韓国型の大学の入学査定官制の定着により「韓国型入学査定官制」が定着
- 2012年以降にも継続的に予算の支援

63

4

入学査定官制の事例: 延世大学

➢ 随時と定時募集
- 選抜人員の比率は、募集人員：随時80%、定時20%
- 随時募集のうち非選抜人員は、定時募集で選抜

➢ 入学査定官制選考の拡大

募集時期	定員	選考名	人員	備考
随時募集	内	真理・自由選考 社会寄与者選考 「社会的配慮対象者」選考	500名 30名 50名	156名増員 10名増員
	外	「延世一つの心」選考	100名	
定時募集		服従村学生特別選考 「特殊教育対象者」特別選考 専門高校出身者特別選考 「延世一つの心」選考 北朝鮮離脱特別選考	131名 15名 51名 19名 少数	芸術・体育は制限

➢ 定員のうち入学査定官制による選抜人員及びその比率：580名(17.04%)
【定員外含む： 896名以上】
➢ 2010年度入学査定官制選考が実施されていたUnderwood国際大学は選考は除外

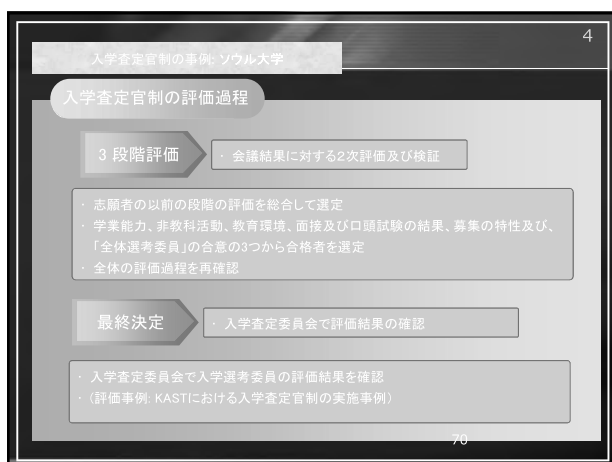
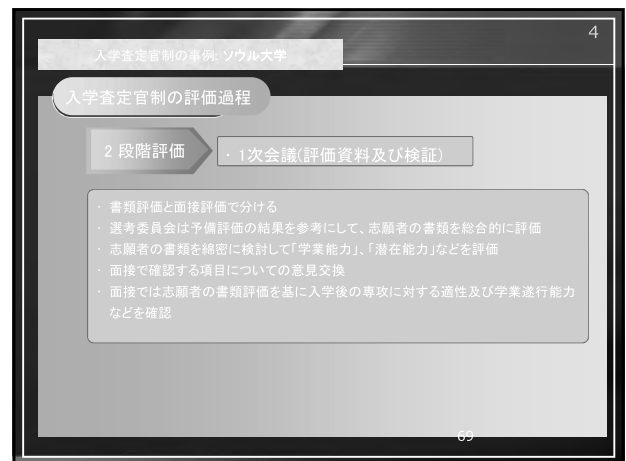
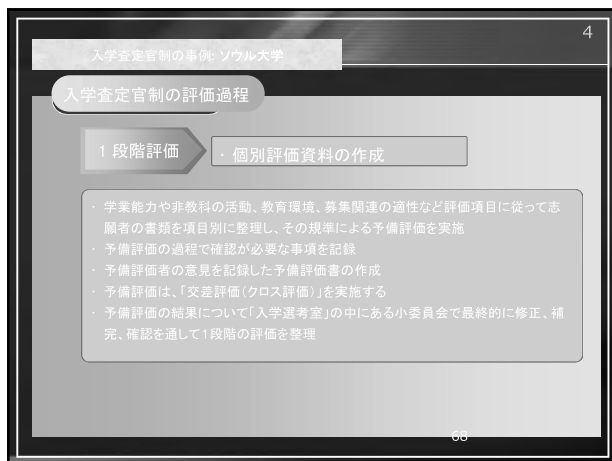
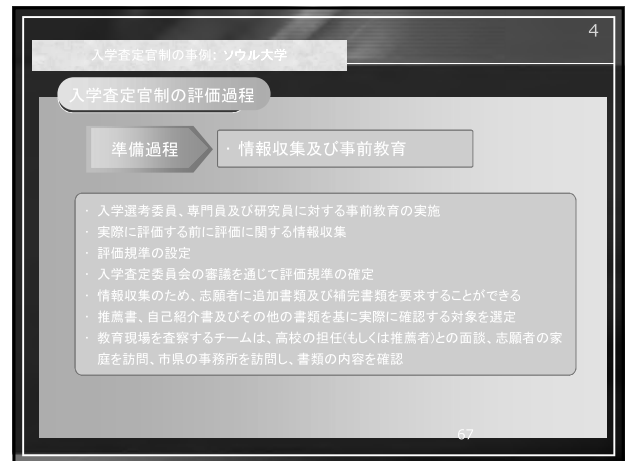
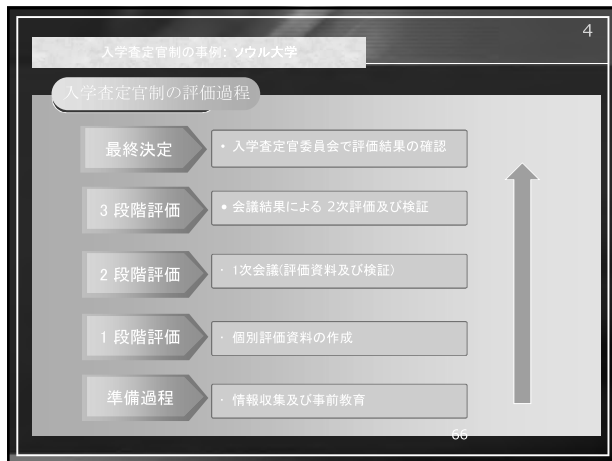
64

4

入学査定官制の事例: 延世大学

募集時期	選考名	募集人員	選考 反映比率(100%)
随時 1	在外国民選考 (中・高の課程履修者)	30	書類 100
随時 2	在外国民選考 (全課程履修者)		書類(実技) 100
随時 2	在外国民選考 (中学高校課程海外履修者)	38	1段階:筆記(実技) 250 2段階:筆記(実技) 250、書類 50
随時 1次	グローバルリーダー選考	496	書類評価 60、論述 40
随時 1次	早期卒業生	200	書類評価 60、論述 40
随時 2次	社会寄与者選考	20	1段階:書類評価 60 2段階:書類評価 60、面接 40
随時 2次	「社会的配慮対象者」選考	50	学生生活記録簿 70、書類評価 30
随時 2次	Underwood国際大学選考	97	1段階:書類評価 60 2段階:書類評価 60、面接 40
随時 2次	「延世一つの心」選考	100	学生生活記録簿 70、書類評価 30
随時 2次	真理・自由選考	344	1段階:教科100(定員の2倍を書類評価対象者として選抜) 2段階:書類評価 100(書類で選抜人員の50%を選抜) 3段階:書類評価 90、面接10(書類及び面接で選抜)
随時	外国人選考		書類評価(実技) 100

65



2010년

교토대학대학원교육학연구과 집중강의 자료

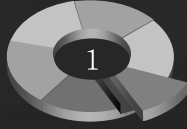
● 국제교육연구 프론티아B

- 연세대학교교육대학원
- 외국어로서의 한국어교육학과
- 강승혜

우리나라 교육과정의 역사

학습 내용

1. 과거의 교육과정
2. 현재의 교육과정(1997~)



과거의 교육과정

1. 과거의 교육과정

1) 교육에 대한 긴급조치기

1945~1946

- 제국주의적 색채가 강한 수신과 → 공민과 신설
- 우리 말 수업 진행
- 국사를 교과목에 포함
- 국어, 수학, 영어 등 도구 교과에 치중

1. 과거의 교육과정

2) 교수요목기

1946~1954

- 교과 지도내용 상술, 기초 능력 배양에 주력
- 교과와 분과주의 선택 → 체계적 지도를 통한 지적 향상에 주력
- 애국애족 교육을 강조, 일제 잔재 청산 위해 노력

- 교육과정 진술체제의 통일성 결여
- 모든 교과의 단원 또는 제재별 이수 시간 수 밝힘
- 사회생활과 신설

1. 과거의 교육과정

3) 제1차 교육과정기(1954~1963)

이념 및 기본 방향

- 교육과정 - 각 학교의 교과목 및 기타 교육활동의 편제
- 교육과정 자체는 교과중심, 교과서는 생활중심
- 국가 수준의 교육과정은 최소한의 필수 요소만 표시
- 반공교육, 도의교육, 실업교육 강조
- 특별활동 시간 배당으로 전인교육지향

1. 과거의 교육과정

3) 제1차 교육과정기(1954~1963)

편제 및 운영

초등학교	<ul style="list-style-type: none"> 교과활동과 특별활동의 2대 편제 8개 교과로 대교과제 도덕과: 전 교과와 학교 전체 교육활동 속에서 지도, 별도의 교과 두지 않음
중학교	<ul style="list-style-type: none"> 교과활동과 특별활동의 2대 편제 대교과제+필수교과(8개 교과)+선택교과(실업·가정, 외국어, 기타 교과) 도덕과: 사회생활과에서 최저 35시간 확보하여 수업
고등학교	<ul style="list-style-type: none"> 수업량을 연 단위로 표시 → 지역사회 실정에 맞는 융통성 있는 운영 강조 도덕과: 주1시간 필수 수업 교과활동=필수+선택(실업계의 경우→전문교과 포함)

1. 과거의 교육과정

4) 제2차 교육과정기(1963~1973)

이념 및 기본 방향

- 교육과정 - 학교의 지도하에 학생들이 가지게 되는 경험의 총체
- 교육과정의 내용 - 자주성, 생산성, 유용성 강조
- 교육과정의 조직 - 통일성, 계통성, 발전성, 통합성 강조
- 교육과정의 운영 - 지역성 강조

1. 과거의 교육과정

4) 제2차 교육과정기(1963~1973)

편제 및 운영

초등학교	<ul style="list-style-type: none"> 편제 - 교과활동, 특별활동, 반공·도덕활동의 3대 편제 교육과정 시간 배당 - 교과는 주당 이수 시간 표시, 특별활동은 시간에 대한 백분율로 표시 사회생활과의 명칭을 사회과로 바꿈
중학교	<ul style="list-style-type: none"> 편제 - 교과활동, 특별활동, 반공·도덕활동의 3대 편제 선택교과를 없애고 공통 필수교과만 설정 교과: 주당 1시간 축소 특별활동: 전체 시간의 8% 이상 수준으로 확보 한글전용 교육을 위해 한자 교육 폐지 → 1972년 문교부령으로 다시 생김
고등학교	<ul style="list-style-type: none"> 공통과목 + 과점별 선택과정(인문과정/자연과정/직업과정) 국가 수준에서 교과별 단위 수 선정 → 학교에서 교육과정 계획 부분 개정 후 국사 교육 강조

1. 과거의 교육과정

5) 제3차 교육과정기(1973~1981)

이념 및 기본 방향

- 국민교육헌장(1968년) + 미국의 학문중심 교육과정에 바탕
- 지식의 구조를 가르치되, 학생 스스로 발견하고 탐구할 수 있도록 해야 함
- 기본 방침: 국민적 자질 함양 및 인간교육의 강화, 지식·기술의 쇄신

1. 과거의 교육과정

5) 제3차 교육과정기(1973~1981)

편제 및 운영

초등학교	<ul style="list-style-type: none"> 반공·도덕 영역 폐지 → 도덕과 신설 / 사회과 일정시간을 국사에 할애 시간 배당 기준표: 학년별 연간 최소 시간량 표시 단위 수업 시간: 40분 혹은 45분으로 변화
중학교	<ul style="list-style-type: none"> 편제: 교과활동 + 특별활동의 2대 편제(도덕과 신설) 국사를 하나의 교과로 독립 실업·가정과에서 여자 기술 → 가정으로 개명 필수교과(12개) + 선택(실업·가정)
고등학교	<ul style="list-style-type: none"> 편제: 교과활동(필수, 필수선택, 과점별 선택) + 특별활동 교과목별 단위 또는 이수 단위에 폭을 두어 융통성과 신축성 부여 총 과목 수 35개로 축소, 특별활동에 12단위 배정 필수과목에는 I, 과점별 선택과목에는 II 부여

1. 과거의 교육과정

6) 제4차 교육과정기(1981~1987)

이념 및 기본 방향

- 목적: 건강, 심미, 능력, 도덕, 자주적인 사람
- 개정의 방침: ① 이전 교육과정의 문제점 보완(학습내용 과다/교과 위주의 분과 교육/전인교육 미흡), ② 교육 정상화를 위한 교육개혁의 추진, ③ 국민 정신 교육의 강화
- 특징: 종합적이고 복합적인 성격(교과중심+ 경험중심+ 학문중심+ 인간중심), 개인적, 사회적, 학문적 적합성 추구

1. 과거의 교육과정

6) 제4차 교육과정기(1981~1987)

편제 및 운영

초등학교	<ul style="list-style-type: none"> • 편제: 교과활동 + 특별활동의 2대 편제 • 1, 2학년: 교과 간 통합 시도 • 특별활동: 1, 2학년 무배정, 4, 5, 6학년 2시간 이상으로 증가 • 운영지침: 계획, 지도, 평가, 기타의 네 부분으로 편성(평가지침 최초 등장)
중학교	<ul style="list-style-type: none"> • 편제: 교과활동 + 특별활동의 2대 편제 • 교과: 보통교육의 성격 강조(2, 3학년에서 1과목 축소, 자유선택과목 신설) • 특별활동: 학급활동, 클럽활동(주당 1시간 배정), 학교행사(별도 시간 이용)
고등학교	<ul style="list-style-type: none"> • 인문계, 실업계, 기타 계열 고등학교의 교육과정 통합 • 교과활동: 보통교과 + 전문교과 • 교육내용의 양 조절 → 전체 이수 단위 축소 • 유사 과목, 관련 교과 통합 • 특별활동: 학도호국단활동(학급활동 + 학도호국단활동), 클럽활동, 학교 행사

1. 과거의 교육과정

7) 제5차 교육과정기(1987~1992)

이념 및 기본 방향

- 목적: 건강, 자주, 창조, 도덕적인 사람
- 개정방침: 교육과정의 적정화, 내실화, 지역화
- 특징
 - 중앙집권적 교육과정 체제의 지역화 강조-교육과정의 효율성 증시
 - 기초 교육의 강화
 - 정보화 사회에 대응하는 교육 강화
 - 교육과정의 효율성 제고

1. 과거의 교육과정

7) 제5차 교육과정기(1987~1992)

편제 및 운영

초등학교	<ul style="list-style-type: none"> • 1, 2학년 통합 교과 신설 • 통합교과에서 국어, 산수 분리 독립 • 연간 수업 시간 수의 증가 • 주당 수업 시간 수의 합리적 조정 • 특별활동 운영의 현실화
중학교	<ul style="list-style-type: none"> • 과학 교육 강화 - 수학과 과학의 시간 증가, 남녀 역할에 대한 제조명
고등학교	<ul style="list-style-type: none"> • 과목당 기준 단위 제시 → 과목의 기준 단위에 맞추어 교과서 편찬

1. 과거의 교육과정

8) 제6차 교육과정기(1992~1997)

이념 및 기본 방향

- 목적: 건강, 자주, 창조, 도덕적인 사람
- 개정 중점
 - ① 교육과정 결정의 분권화 ② 교육과정 구조의 다양화
 - ③ 교육과정 내용의 적정화 ④ 교육과정 운영의 효율화
- 특징
 - 편성운영체제의 개선
 - 국가 수준의 교육과정: 전국 공통적 일반적 기준으로서의 역할
 - 지역 수준의 교육과정: 일선 학교의 교육과정 편성 운영 지원을 위한 과정
 - 학교 수준의 교육과정: 각 학교의 실정에 맞게 만든 교육과정

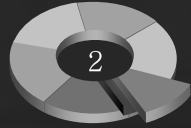
1. 과거의 교육과정

8) 제6차 교육과정기(1992~1997)

편제 및 운영

초등학교	<ul style="list-style-type: none"> • 편제: 교과, 특별활동, 학교 재량시간 • 기본 생활습관과 예절교육 강화 • 저학년의 통합교과 재조정 • 학교 재량시간 신설
중학교	<ul style="list-style-type: none"> • 주당 수업시간을 34시간으로 조정 • 실업·가정과를 통합 개편하여 남녀 공통 필수로 지정 • 선택교과제 도입
고등학교	<ul style="list-style-type: none"> • 개방형 체제 선택 • 학생의 다양성에 비추어 다양한 과목 신설

현재의 교육과정(1997~)



2. 현재의 교육과정(1997~)

1) 이념 및 기본 방향

이념 및 기본 방향

- 목적: 세계화, 정보화 시대를 주도한 자율적이고 창의적인 한국인 육성
- 추구하는 인간상
 - ① 개성을 추구하는 사람 ② 창의적인 능력을 발휘하는 사람
 - ③ 진로를 개척하는 사람 ④ 새로운 가치를 창조하는 사람
 - ⑤ 공동체 발전에 공헌하는 사람
- 구성방침
 - ① 기초적인 기본적인 학습능력 배양 지향
 - ② 교육내용의 양과 수준의 적정화 → 국민공통 기본교육과정 및 선택중심 교육과정체제
 - ③ 지역 교육청과 학교의 교육과정 편성운영 자율성 확대
 - ④ 주기적인 교육과정 평가체제 구축

2. 현재의 교육과정(1997~)

1) 이념 및 기본 방향

이념 및 기본 방향

- 제7차 교육과정의 주요 성격과 구조적 특징
 - ① 국민공통 기본교육과정과 선택중심 교육과정으로 이원화된 구조
 - ② 수준별 교육과정 도입
 - ③ 재량활동 신설·확대
 - ④ 질 관리 중심 교육과정 평가체제 도입
 - ⑤ 교육기관 및 교육행정 기관의 역할 명료화를 통해 교육과정 분권화
 - ⑥ 교육과정 운영의 유연성 증가

2. 현재의 교육과정(1997~)

2) 편제 및 운영

편제 및 운영

교육 단계	편제 및 운영
초등학교	<ul style="list-style-type: none"> • 편제: 교과, 재량활동, 특별활동 편성 • 초등학교 재량활동의 강화 • 초등학교 수준별 교육과정: 수학: 단계형, 국어·사회·과학·초등영어-심화·보충형 • 자연과 영어 교과 → 과학과 외국어로 개칭 • 교육과정 지침을 통해 직접적인 체험활동 강조
중학교	<ul style="list-style-type: none"> • 편제: 교과, 재량활동, 특별활동 • 재량활동 신설: 교과재량 + 창의적 재량 • 수준별 교육과정: 수학과 영어-단계형, 국어·사회·과학-심화·보충형 • 가정기술·산업 교과를 기술·가정으로 통합(남녀 공통 이수), 제2외국어 신설
고등학교	<ul style="list-style-type: none"> • 고등학교 2, 3학년은 선택중심 교육과정 편성 • 재량활동 신설 • 과정 부분을 폐지하여 학생 개인별 교육과정 운영이 가능하도록 함 • 교육과정 편제에 교과군 단위 개념 도입→단위학교의 자율적 교육과정 편성 능력

2. 현재의 교육과정(1997~)

3) 주요 특징과 쟁점

수준별 교육과정

- 수준별 수업: 학생들의 수준에 적합한 교육적 처치를 하는 수업
- 수준별 교육과정: 수준별 수업을 지원하기 위한 교육목표, 내용, 방법, 평가
- 수준별 수업을 지원하기 위한 수준별 교육과정 편성·운영이 어떤 교육적 효과를 가져올 것인가?

선택중심 교육과정

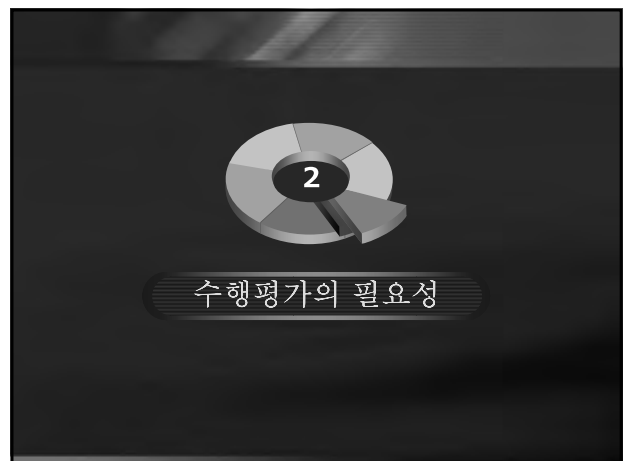
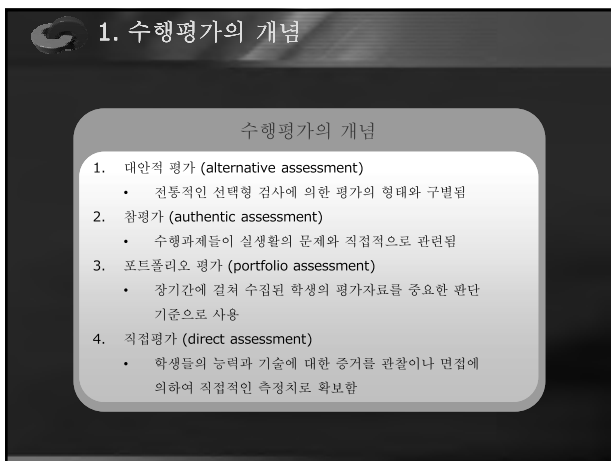
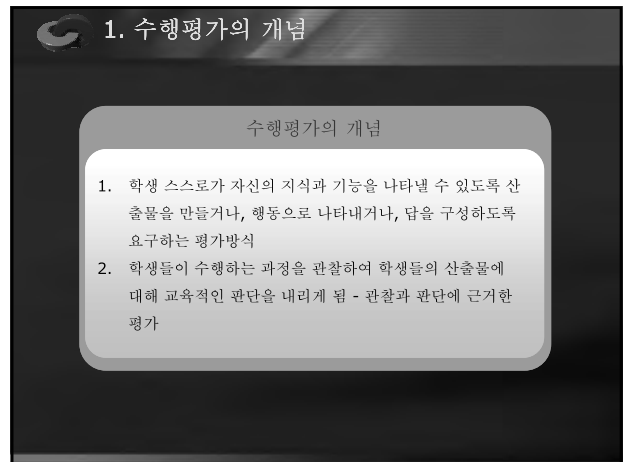
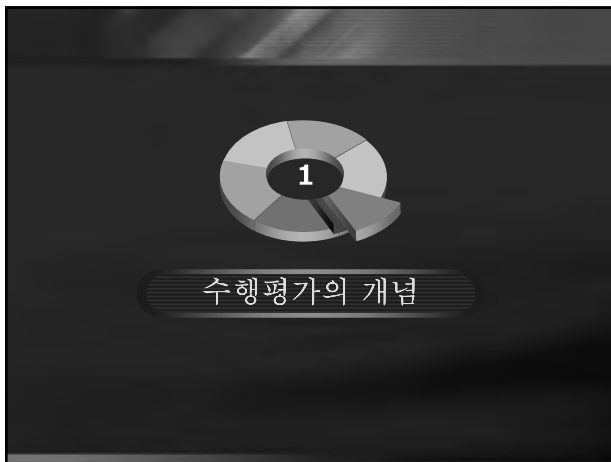
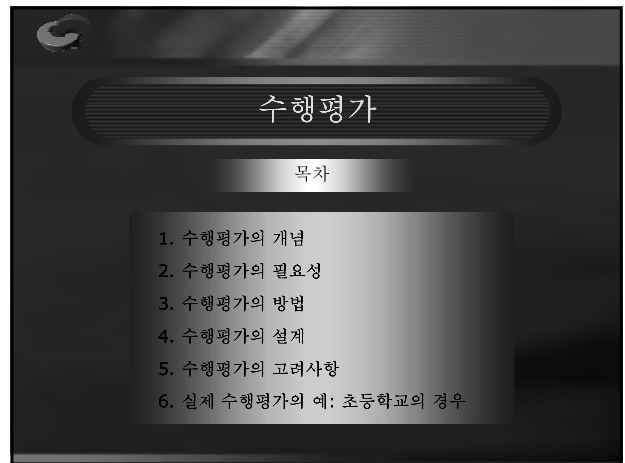
- 11, 12학년 학생들이 진로, 적성, 능력에 따른 선택교육과정
- 고등학교에서 보통교육과 전문교육을 어떤 비율로 다룰 것인가?

2. 현재의 교육과정(1997~)

3) 주요 특징과 쟁점

재량활동 교육과정

- 교육과정 운영의 자율화 도모
- 1970년대 '자유학습의 날' 시행에서 연원을 찾을 수 있음
- 프랑스 10% 개혁운동과도 유사한 교육과정의 운영 체제임
- 국가는 교육과정과 관련된 권한을 실질적으로 이양, 지역이나 학교는 이를 수용할 수 있는 인력, 예산, 문화, 조직을 갖추어야 함



2. 수행평가의 필요성

수행평가의 필요성(백순근, 1998)

1. 아는 것을 실제로 적용할 수 있는지의 여부를 파악하기 위함
 - 인지적으로 아는 것도 중요하지만 아는 것을 실제로 적용할 수 있는지를 파악하는 것도 중요함
2. 다양한 개인적 특성이나 상황을 고려한 타당한 평가를 하기 위함
 - 획일적인 표준화 검사를 적용하기 어려운 다양한 개인적 특성이나 상황에서 타당한 평가를 할 수 있음

2. 수행평가의 필요성

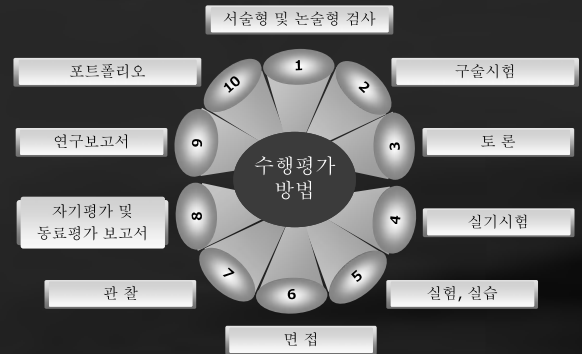
수행평가의 필요성

3. 지속적이고 종합적인 평가가 되도록 함
 - 종래의 평가에서는 교수-학습의 결과를 한 두번에 걸쳐 평가했으나 수행평가를 통하여 학생 개개인의 특성과 수준을 지속적이며 종합적으로 평가할 수 있음
4. 학습자 개인에게 의미 있는 활동이 되도록 함
 - 기계적인 암기식 학습활동에서 벗어나 학습자 개인에게 의미 있는 학습활동이 이루어지도록 함
5. 교수·학습 목표와 평가내용을 직접적으로 관련시킴
 - 수행평가를 통하여 보다 직접적으로 교수-학습 목표의 달성 여부를 판단할 수 있음



수행평가의 방법

3. 수행평가의 방법



3. 수행평가의 방법

수행평가의 방법

1. 서술형 및 논술형 검사
 - 주관식 검사. 질문의 형태는 창의성, 문제해결력 등 고등사고 기능을 묻는 방향으로 전환되고 있음
2. 구술시험
 - 특정 교육내용이나 주제에 대하여 자신의 의견이나 생각을 발표하도록 하여 학생의 준비도, 이해력, 표현력, 판단력, 의사소통능력 등을 평가하기 위한 방법
3. 토론
 - 교수-학습 활동과 평가활동을 통합하는 대표적인 방법으로 특정 주제에 대해 학생들이 서로 토론하는 것을 보고 평가하는 것임

3. 수행평가의 방법

수행평가의 방법

4. 실기시험
 - 종래의 실기시험이 평가가 통제되거나 강요되는 상황이라면 수행평가는 자연스러운 상황에서 실제로 하는 것을 여러 번 관찰하여 그 수행능력을 평가하는 것임
5. 실험 실습
 - 교사는 학생들의 실험 실습 과정을 직접 관찰하고 아울러 함께 제출된 결과 보고서를 동시에 고려하여 평가하게 됨
6. 면접
 - 보다 심도 있는 정보를 얻을 수 있고 사전에 예상할 수 없었던 정보나 자료를 얻을 수 있으며, 진행상황 통찰성을 발휘할 수 있음

3. 수행평가의 방법

수행평가의 방법

7. 관찰

- 교사들은 늘 학생을 접하고 있고 개별 학생 단위든 집단 단위든 항상 관찰하게 되는데, 이러한 자연스러운 상황에서 관찰을 통하여 평가함

8. 자기평가 및 동료평가 보고서

- 자기평가란 학습자 스스로 학습의 과정이나 결과에 대한 자세한 평가 보고서를 작성하여 제출하도록 하는 것임

9. 연구보고서

- 학생의 능력이나 흥미에 적합한 주제를 선택하여 학습자 나름대로 자료를 수집하고 분석, 종합하여 연구보고서를 작성하여 제출

3. 수행평가의 방법

수행평가의 방법

10. 포트폴리오 (portfolio)

- 학생이 쓰거나 만든 지속적인면서도 체계적으로 모아 둔 개인별 작품집 혹은 서류철을 이용하는 평가방법
- 단편적인 영역에 대해 일회적으로 평가하지 않고 학생 개인의 변화, 발달 과정을 종합적으로 평가하기 위해 전체적이면서도 지속적인 평가를 강조
- 평가에 있어 학생의 역할이 중시되며, 결과뿐만 아니라 과정을 강조하고, 현재의 상태보다 발전 가능성에 초점
- 관련도서 목록(학생이 읽은 책 혹은 참고한 책), 보고서, 과제와 관련된 기록장, 학습활동을 기록한 오디오나 비디오테이프 등



수행평가의 설계

4. 수행평가의 설계

평가목적의 확인

1. 평가목적의 규명
2. 평가결과를 활용할 사람 확인
3. 평가결과와 용도
4. 평가대상 확인

평가내용의 결정

1. 평가의 일반적인 내용 영역 및 기능을 밝힘
2. 수행과제 선정
3. 수행준거 열거 : 투브릭 활용

평가방법의 설계

1. 성취 행동을 가장 적절하게 평가할 수 있는 방법 결정
2. 평가 시행의 공고 여부 결정
3. 수집할 평가자료의 양 결정

채점 계획의 수립

1. 채점방법
2. 채점자
3. 평가결과와 기록방법

4. 수행평가의 설계

평가목적의 확인

1. 평가목적의 규명
2. 평가결과를 활용할 사람 확인
3. 평가결과와 용도
4. 평가대상 확인

평가내용의 결정

1. 평가의 일반적인 내용 영역 및 기능을 밝힘
2. 수행과제 선정
3. 수행준거 열거 : 투브릭 활용

평가방법의 설계

1. 성취 행동을 가장 적절하게 평가할 수 있는 방법 결정
2. 평가 시행의 공고 여부 결정
3. 수집할 평가자료의 양 결정

채점 계획의 수립

1. 채점방법
2. 채점자
3. 평가결과와 기록방법

4. 수행평가의 설계

평가목적의 확인

1. 평가목적의 규명
2. 평가결과를 활용할 사람 확인
3. 평가결과와 용도
4. 평가대상 확인

평가내용의 결정

1. 평가의 일반적인 내용 영역 및 기능을 밝힘
2. 수행과제 선정
3. 수행준거 열거 : 투브릭 활용

평가방법의 설계

1. 성취 행동을 가장 적절하게 평가할 수 있는 방법 결정
2. 평가 시행의 공고 여부 결정
3. 수집할 평가자료의 양 결정

채점 계획의 수립

1. 채점방법
2. 채점자
3. 평가결과와 기록방법

4. 수행평가의 설계

평가목적의 확인	<ol style="list-style-type: none"> 1. 평가목적의 규명 2. 평가결과를 활용할 사람 확인 3. 평가결과와 용도 4. 평가대상 확인
평가내용의 결정	<ol style="list-style-type: none"> 1. 평가의 일반적인 내용 영역 및 기능을 밝힘 2. 수행과제 선정 3. 수행준거 열거 : rubric 활용
평가방법의 설계	<ol style="list-style-type: none"> 1. 성취 행동을 가장 적절하게 평가할 수 있는 방법 결정 2. 평가 시행의 공고 여부 결정 3. 수집할 평가자료의 양 결정
채점 계획의 수립	<ol style="list-style-type: none"> 1. 채점방법 2. 채점자 3. 평가결과와 기록방법

4. 수행평가의 설계

평가목적의 확인	<ol style="list-style-type: none"> 1. 평가목적의 규명 2. 평가결과를 활용할 사람 확인 3. 평가결과와 용도 4. 평가대상 확인
평가내용의 결정	<ol style="list-style-type: none"> 1. 평가의 일반적인 내용 영역 및 기능을 밝힘 2. 수행과제 선정 3. 수행준거 열거 : rubric 활용
평가방법의 설계	<ol style="list-style-type: none"> 1. 성취 행동을 가장 적절하게 평가할 수 있는 방법 결정 2. 평가 시행의 공고 여부 결정 3. 수집할 평가자료의 양 결정
채점 계획의 수립	<ol style="list-style-type: none"> 1. 채점방법 2. 채점자 3. 평가결과와 기록방법

수행평가의 고려사항

5

5. 수행평가의 고려사항

고려사항

- 신뢰도
- 비용 및 시간
- 채점 기준
- 타당도

5. 수행평가의 고려사항

수행평가의 고려사항

1. 비용 및 시간
 - 컴퓨터로 채점할 수 있는 선다형 검사에 비해 채점의 공정성을 위해 많은 교사가 필요하고 검사에 소요되는 시간과 채점 시간이 더 필요함
2. 채점 기준
 - 다양한 평가방법으로 점수를 부여함
 - 문제를 풀어나가는 과정에서 부분 점수를 주게 되는데 이러한 부분 점수 부여에 대한 기준 필요함
 - 수행평가의 다양성은 평가결과와 일관성을 저해할 수 있음

5. 수행평가의 고려사항

수행평가의 고려사항

3. 타당도
 - 수행평가는 평가자의 주관적인 판단에 기초하기 때문에 타당성을 확보하기 위한 근거를 수집하는 방식들이 명료하게 제시되지 못함
 - 수행평가는 학생들의 능력이나 기술에 대한 직접적인 측정이므로 전통적인 검사도구에 비해 타당도가 중시됨
 - 내용타당도 중시 - 평가의 구체적인 내용이 평가하고자 하는 구체적인 목표나 내용을 대표하고 있는지에 대한 판단



5. 수행평가의 고려사항

수행평가의 고려사항

4. 신뢰도

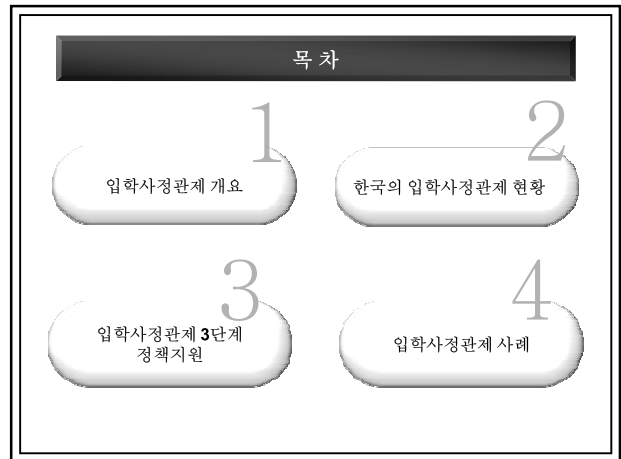
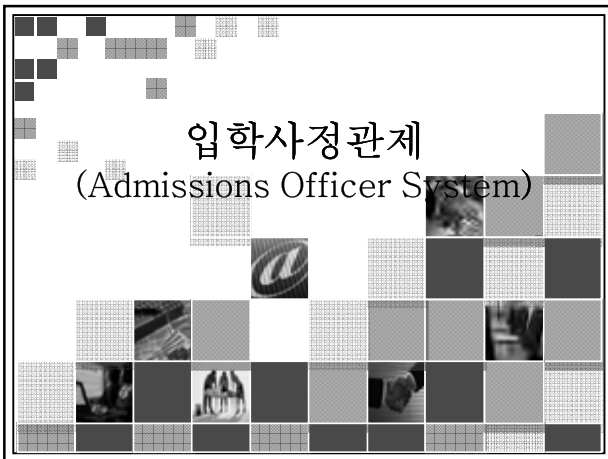
- 수행평가의 신뢰도를 확보하기 위해 다수의 채점자 확보, 명확한 채점기준, 채점자 훈련이 필요함
- 수행평가는 관찰과 판단에 의존하는 평가이기 때문에 점수를 부여하는 과정에서 일관성이나 공정성을 잃기 쉬우므로 신뢰할 수 있는 평정이나 채점을 하는 일은 매우 중요함
- 수행평가의 신뢰도를 높이기 위해서 명확한 채점기준의 확보와 채점자 훈련의 강화가 필요함



6. 실제 수행평가의 예: 초등학교의 경우

실제 수행평가의 예:

- 초등학교 영어 수업의 예:
 - 문법: 'be going to'를 사용하여 미래 계획을 말할 수 있다.
 - 기능: 방학 중 계획 말하기
- 초등학교 수학수업의 예:
 - 육면체(직육면체, 정육면체) 면적 구하기
 - 육면체(직육면체, 정육면체) 전개도 그리기



입학사정관제 개요

입학사정관제의 개념

- 입학사정관이 성적 뿐만 아니라 다양한 전형자료를 심사하고 학생의 잠재력, 소질 등을 평가하여 합격여부를 결정하는 제도
- 입학사정관이란 '다양한 전형자료를 심사, 학생의 잠재력 및 소질을 평가하여 입학여부를 결정하는 전문가'

입학사정관제의 주요역할

- 평시: 교묘 및 대학의 교육과정을 분석하고 관련 정보 자료 축적 및 관리, 효과적인 전형방법 연구 개발
- 전형기간: 다양한 전형자료를 심사, 평가하여 입학여부 결정
- 입학 후: 학생의 학업과 학교적응 지원 등 학생 사후관리

한국의 입학사정관제 현황

도입 배경

현행 대입전형제도

- 점수 위주의 기계적 선발방식
- 대학의 선발과 교육간 연계 미흡

대입전형 선진화

- 학업과 학교 적응 모니터링 및 지원
- 학생부를 비롯한 다양한 전형요소 심층분석, 반영
- 모집 단위별 특성에 맞는 잠재력 있는 학생 선발
- 신입생 사후관리를 통한 선발과 교육 연계 강화

입학
사정
관제
도입

한국의 입학사정관제 현황

도입 및 추진 실적

- '04년 10월, 2008학년도 이후 대학입학제도 개선안 발표 시 '입학사정관제' 도입 예고
- '06년 8월, '2008학년도 대입전형기본계획'부터 매년 기본계획에 입각한 입학사정관제의 운영을 권장
- 입학사정관제 도입을 위한 정책연구 실시['06년~]
- ※ '06년 1건, '08년 3건 완료[입학사정관제 도입방안, 정착 모형개발, 공정성 확보방안 등]

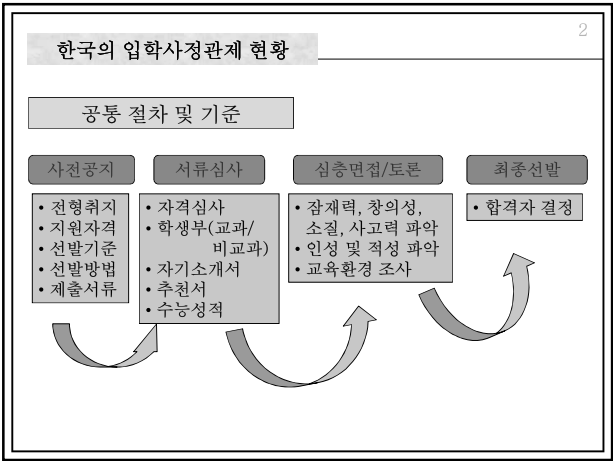
한국의 입학사정관제 현황

도입 및 추진 실적

➢ 입학사정관제 재정지원 및 실적

연도	예산	지원대학	사정관수 (정규/비정규)	선발학생수
2007년	20억원	10개 대학	40명 (3명/39명)	254명
2008년	157억원	40개 대학	218명 (17명/201명)	4,401명

➢ 학생선발과정에서 서류심사에만 주로 참여하고, 대부분의 사정관이 비정규직으로 채용되어 신분 불안정



한국의 입학사정관제 현황

2

공통 전형 요소	
요소	주요내용
학생의 특성	<인지적 특성> 사고력: 이해력, 분석력, 논리적 사고력, 창의력, 문제 해결력 등 적성: 관련분야에 대한 소질, 학업적성, 대학 또는 학과 수학 능력 등 표현력: 의사소통능력(토론/설득력) 등 <정의적 특성> 인성: 자신감, 적극성, 리더십, 책임감, 목표지향성, 자기조절능력, 도덕성, 사회성 등 흥미: 지적 호기심, 열정, 학습동기 등 태도: 가치관, 학습태도 등 잠재력, 미래 성장가능성, 학과 적응 가능성 등
대학 및 모집전형에의 적합성	- 적합성 건학 이념 및 학과 특성에 부합하는 학생인지 여부 - 리더십 전형, 사회적 배려 전형 등 모집전형에 부합하는지 여부
교육환경	가정환경, 교육여건, 고등학교의 교육과정 및 특성 등

3

입학사정관제 3단계 정책지원

향후 입학사정관제 지원정책

1단계: 입학사정관제 내실화(2009년)

- ▶ 선택과 집중의 원칙에 따른 선도대학 육성
 - 선도대학에 집중, 투자하여 내실화 도모
 - 입학사정관의 서류·면접심사 등 참여 확대
 - 입학사정관제 지원사업 47개 대학 선정(선도 15, 계속 23, 신규 9)
- ▶ 입학사정관 전문 양성·훈련 프로그램 개설·운영
 - 자질 있는 입학사정관 인력 풀의 안정적 확보
 - 전문 양성·훈련프로그램 운영기관 5개 대학 선정

3

입학사정관제 3단계 정책지원

향후 입학사정관제 지원정책

2단계: 입학사정관제 확대(2010-2011년)

- 선도대학을 확대
- 입학사정관의 역할 확대, 주도적 참여
- 학생부 기록 내실화, 학교정보 공시, 진학담당 교사의 전문성 강화
- 로 사교육 의존 없이 전형 대비
- 입학사정관제를 활용한 학생 선발인원 및 입학사정관 채용 확대를 위한 예산 지원 확대

3

입학사정관제 3단계 정책지원

향후 입학사정관제 지원정책

3단계: 입학사정관제 정착(2012년)

- 선도대학 이외의 대학까지 확산
- 대학의 특성 및 전형의 특성에 따른 한국형 입학사정관제 정착
- 2012년 이후에도 지속적으로 예산 지원

4

입학사정관제 사례: 연세대

▶ 수시모집과 정시모집

- 선발인원 비율 모집인원 대비 수시 80%, 정시 20%
- 수시모집 미선발 인원은 정시모집으로 이월하여 선발

▶ 입학사정관제 전형 확대

모집시기	정원	전형명	인원	비고
수시모집	내	진리·자유 전형	500명	156명 증원
		사회기여자 전형	30명	10명 증원
		사회적배려대상자 전형	50명	
	외	연세한마음 전형	100명	
정시모집		농어촌학생 특별전형	131명	예, 체능계 제외
		특수교육대상자 특별전형	15명	
		전문계고교출신자 특별전형	51명	
		연세한마음 전형	19명	
		새터민 특별전형	약간명	

▶ 정원 내 입학사정관제 선발인원 및 비율: 580명(17.04%) [정원 외 포함: 896명 이상]
 ▶ 2010학년도 입학사정관제 전형이었던 연세대학교 연세한마음 전형 입학사정관제 전형 제외

4

입학사정관제 사례: 연세대

모집 시기	전형명	모집 인원	전형 요소별 반영비율(100%)
수시1	재외국민전형 (중고교과정 해외이수자)	30	서류 100
수시2	재외국민전형 (전과정해외이수자)		서류(실기) 100
수시2	재외국민전형 (중고교과정해외이수자)	38	1단계: 필기(실기) 250 2단계: 필기(실기) 250, 서류 50
수시1차	글로벌리더 전형	496	일괄합산: 서류평가 60, 논술 40
수시1차	조기졸업자	200	일괄합산: 서류평가 60, 논술 40
수시2차	사회기여자 전형	20	1단계: 서류 60 2단계: 서류 60, 면접 40
수시2차	사회적배려대상자 전형	50	일괄합산: 학생부 70, 서류 30
수시2차	연세한마음 전형	97	1단계: 서류 60 2단계: 서류 60, 면접 40
수시2차	연세한마음 전형	100	일괄합산: 학생부 70, 서류 30
수시2차	진리자유전형	344	1단계: 교과 100(2배수 내외를 서류평가 대상자로 선발) 2단계: 서류 100(서류로 선발인원의 50% 내외를 선발) 3단계: 서류 90, 면접 10(서류 및 면접으로 나머지 선발)
수시	외국인 전형		서류(실기) 100

4

입학사정관제 사례: 서울대

입학사정관제 평가 과정

```

graph TD
    A[준비과정] --> B[1단계 평가]
    B --> C[2단계 평가]
    C --> D[3단계 평가]
    D --> E[최종결정]
    
```

- 최종결정**: 입학사정위원회에서 평가 결과 확인
- 3 단계 평가**: 회의결과에 대한 2차 평가 및 검증
- 2 단계 평가**: 1차 회의(평가자료 및 결과 검증)
- 1 단계 평가**: 개인별 평가 자료 작성
- 준비과정**: 정보 수집 및 사전 교육

4

입학사정관제 사례: 서울대

입학사정관제 평가 과정

준비 과정

• 정보 수집 및 사전 교육

- 입학전형위원, 전문위원 및 연구원에 대한 사전 교육 실시
- 실제 평가 전 평가를 위한 정보 수집
- 평가기준 설정
- 입학사정위원회의 심의를 통해 평가기준 확정
- 정보 수집을 위해 지원자에게 추가 서류 제출이나 서류의 보완을 요구할 수 있음
- 직접 실사를 위해 확인하기도 함
- 추천서, 자기소개서 및 기타 증빙 서류의 지원자 정보를 기준으로 실사 대상자 선정
- 현장 방문 팀은 고교 담임 교사(혹은 추천자)와의 면담, 지원자가정 방문, 읍면 사무소 방문을 통해 서류 내용 확인

4

입학사정관제 사례: 서울대

입학사정관제 평가 과정

1 단계 평가

• 개인별 평가자료 작성

- 학업 능력이나 교과 외 활동, 교육 환경, 모집단위 관련 적성 등 평가 항목에 따라 지원자들의 서류를 항목별로 정리하고 기준에 따라 예비평가 실시
- 예비평가 과정에서 특이사항이나 면접에서 확인해야 할 사항 기록
- 예비평가자의 의견을 기록한 예비평가서 작성
- 예비평가는 교차 평가를 거친
- 예비평가 결과에 대해서 입학 전형실 내의 소위원회에서 최종적으로 수정, 보완, 확인 과정을 거쳐 1 단계 평가 마무리

4

입학사정관제 사례: 서울대

입학사정관제 평가 과정

2 단계 평가

• 1차 회의(평가 자료 및 결과 검증)

- 서류평가와 대면 평가로 나뉘어 점
- 전형위원들은 예비평가 결과를 참고하여 지원자들의 서류를 종합적으로 평가
- 학생들의 서류를 면밀히 검토하여 지원자들의 학업능력과 잠재력 등을 평가
- 면접에서 확인할 사항 미리 의견 교환
- 면접에서는 지원자들의 서류 평가서를 바탕으로 모집단위 관련 전공적성이나 학업 수행 능력 등을 확인

4

입학사정관제 사례: 서울대

입학사정관제 평가 과정

3 단계 평가

• 회의결과에 대한 2차 평가 및 검증

- 지원자에 대한 이전 단계의 평가를 수합하여 합격자 선정
- 학업능력, 교과 외 활동, 교육환경, 면접 및 구술고사 결과와 모집단위 특성 등을 종합적으로 고려하여 전체 전형위원간 합의를 거쳐 합격자 선정
- 지난 평가 과정 다시 한 번 반복하여 확인

최종 결정

• 입학사정위원회에서 평가 결과 확인

- 입학사정위원회에서 입학전형위원들의 평가 결과 확인
- (평가사례: 경남 OO고등학교 학생의 경우)